

連続公開シンポジウム

# 「司書教諭資格付与科目の教育実践を検討する」

## 第4回「情報メディアの活用」記録

(2016年9月24日(土) 実施；大阪教育大学天王寺キャンパスにおいて)

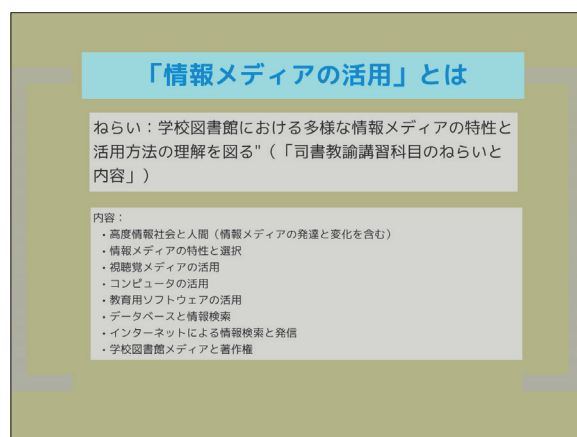
### 今井福司「情報メディアの活用に関する授業実践について」



このサイズだと普通マイク使わない方のほうが多いと思うのですが、私、元々声がくぐもっているようなこともありまして、あとなるべく多くの方にちゃんと聞いていただきたいってこともありまして、それでちょっとマイクを使わせていただきます。よろしく願いいたします。20分時間をいただいているので、今、13時20分ですから13時40分くらいまでということになります。普段ですと授業やっている時には冗談を3割くらいにしながら7割くらい

の話をするというのがいつもののですが、今日は皆さんいわばプロの方が多くいらっしゃるのです、これに関して冗談めいた話は一切なしにしていきたいと思います。この会も実は私、3回連続出ておりまして、4回目に発表者として立ち会っているわけですが、たぶんいろいろな論点があると思うのです。そのいろいろな論点について先陣を切ってお話し申しあげるといってもありまして、その論点を少しずつ提示しながら皆さんも、フロアの皆さんで考えるときのヒントにしていいただければと思います。

では最初に、資料のほう、確認していただければと思います。資料は三種類ございまして、この「情報メディアの活用」に関する授業実践について、A3の形で印刷されております4ページまでの資料一つ。それからこれは「情報メディア利用論」と書いてありますが、これ私の青山学院大学で実際に授業している時のシラバスです。それから参考資料もう一つとして「bluelines 教師の心得」<sup>1)</sup>というこのプリントです。こちら三つの種類の資料お手元のほうにあるかどうか、ご確認ください。



まずこのお話を始めていく際にまず確認しておきたいところとしては、「情報メディアの活用」という言葉です。これは学内の人間に説明する時にですね、「情報メディアの活用」っていうのはすごく説明しづらいような感じがしたのです。そこで1回、文部科学省の「司書教諭の講習科目のねらいと内容」というのを見てみたいと思います。

## 「情報メディアの活用」に関する 授業実践について

白百合女子大学基礎教育センター 今井福司

2016/9/24 第4回「司書教諭資格付与科目実践共有の会」

### 1 前提

#### 1.1 文部科学省「司書教諭の講習科目のねらいと内容」

##### ねらい

- 学校図書館における多様な情報メディアの特性と活用方法の理解を図る

##### 内容

- 高度情報社会と人間（情報メディアの発達と変化を含む）
- 情報メディアの特性と選択
- 視聴覚メディアの活用
- コンピュータの活用
- 教育用ソフトウェアの活用
- データベースと情報検索
- インターネットによる情報検索と発信
- 学校図書館メディアと著作権

#### 1.2 「情報メディア」の定義

##### 情報の定義

送り手と受け手の存在を想定したときに、送り手からチャネルやメディアを通じて受け手に伝えられるパターン。図書館情報学では、ブルックス (Bertram Claude Brookes 1910-1991) による「受け手の知識の構造に変化を与えるもの」という定義が広く知られている。一方、受け手の内部に形成される新しい構造を情報と考えたり、作用の過程そのものを情報と呼ぶ立場もある。情報は、データと知識の区別、また、物質やエネルギーとの対比

1

によっても説明される。

情報という語は、明治初期に酒井忠恕<sup>\*1</sup>によって造語されたが、日常的に使用されるようになったのは最近のことである。その日常的な用法では、知識が蓄積であるのに対して、情報は流れとみなされる傾向がある。情報の意味は多様で、分野に依存しているので定義ができないという意見もあるが、情報の定義や意味の探求は図書館情報学の基本的な研究課題の一つとなっている。[1, p. 105]

##### メディアの定義

(1) 情報メディアのこと。(2) 記録媒体のこと。広義にはアナログメディアを含むが、狭義にはコンピュータの外部記憶装置に用いる可搬のデジタル記憶媒体。(3) マスコミのこと。新聞、テレビなどのいわゆるマスコミが1990年代にメディアと呼ばれるようになり、報道や社会学の領域で定着した。「メディアの時代」、「メディアイベント」などの「メディア」はマスコミを指している[1, p. 237]。

- 今井の理解としては、どちらも曖昧であると考えており、学校現場で立場が変われば意味が変わってしまうと教えている。

#### 1.3 担当している授業について

2016年9月現在、以下の大学で「情報メディアの活用」を教えている。

- 白百合女子大学（前期、受講生は11名）
  - － 卒業認定の科目カウント外、完全に資格認定科目として設置のため、人数は年々減少気味である。対応策として、再来年から人間総合学部の初等教育学科の選択科目（卒業認定+教職科目）として組み入れてもらうこととなっている。
- 青山学院大学（後期、受講生は35名）
  - － 卒業認定のための選択科目としても設けられている（そのため、科目名称は「情報メディア利用論」となっている）ため、教職志望でない学生さんも多く含まれている。

過去の非常勤を含めて、通常授業期間内での実施であり、集中講義としては「情報メディアの活用」は担当していない。毎週行う授業なので、課題が出しやすい。また、内容のアップデートを常に行われるためテキストは使用せず、毎回資料を作成して配付している。

<sup>\*1</sup> “きかいただひろ”

2

#### 1.4 想定する受講生のレベル、教員としての姿勢

- 100の内容を教えて5割の学生さんが身につけることも大切。ただ、自分の担当授業では、80の内容に減らしても8割の学生さんが身につけるようにして欲しい。
- gorotaku氏のブログ「教師の心得」から (URL: <http://blueines.hatenablog.com/entry/20110908/1315487472>)

### 2 「情報メディアの活用」実践について

#### 2.1 基本的な授業構成

基本的には「学校図書館メディアの構成」や「学習指導と学校図書館」とわざと連携させている。例えば、出版流通や、メディアを使った指導案がその例である（参考資料のシラバス参照）

1. 印刷メディアとWebメディアの対比（載せて取次や出版流通を扱う）
  - 学校図書館メディアの構成との連絡関係
2. メディアを活用した学習指導案の作成
  - 学習指導と学校図書館との連絡関係
3. 情報検索を扱う授業での「コンピュータサイエンスアンブレラ」の活用

#### 2.2 使用している教材やWebサイトについて

- Contents Management System を使った授業 (URL: <http://halfmoon.libriarius.jp/>)

#### 2.3 新しい教材を取り込む工夫

##### 2.3.1 Twitter を用いた大学間授業実践

- 詳細は右記論文を参照。(URL: <http://ci.nii.ac.jp/naid/110008723198>)
- 2大学の時間帯が異なる授業をTwitterを用いて擬似的に連携させた実践。
- 電子書籍に対する態度などを2大学間でやり取りした。
- 新しいメディアを取り入れやすいことから実現に至った授業である。

##### 2.3.2 環境教育データベースを使った指導案

- 本務先で構築した環境教育データベースで「情報メディアの活用」で実施している指導案作成に活かした例。
- 色のコードや名前を使って、算数の表やグラフ作成や、総合的な学習の時間の指導案を作る

3

例が見られた。

- 詳細は、右記プレゼンテーションファイルを参照のこと。(URL: <http://bit.ly/IASL2016-IMAI>)

### 3 ディスカッションに向けた論点提示

1. 他の司書教諭講習科目との差異化
2. 大学の初年次教育と何が違うのか。
3. 教員養成課程の情報科目と何が違うのか。
4. どの程度の新しい内容を盛り込むべきか。
5. テキストブックは成立するのか。
6. 今後どの程度、ICTは学校現場に普及するか
7. ICTはどの程度学校図書館に入ってくるか
8. ICTに興味を持つ教員は味方になれるか

#### 参考文献

- [1] 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会. 図書館情報学用語辞典. 丸善出版, 第4版, 2013.

4

## 講義内容詳細：情報メディア利用論

戻る

## 講義概要/Course description

学校教育におけるインターネットの普及は目覚ましく、各家庭への普及や、携帯電話を通じたアクセス、ネットカフェの普及を考えると、児童生徒がインターネットに触れる機会が豊富に用意されているといえる。一方で、教育現場は十分ではなく、教員の関わりを教えるべきに十分に把握できていないことがある。司書教諭は「図書指導の充実とあわせ学校における情報教育推進の一環を図るメディア専門職としての役割を果たしていくことが求められる」とされ、児童生徒だけでなく、教員に対しても指導・助言する役割を果たすことが期待されている。こうした役割を果たせるように、授業では知識を身につけるだけでなく、それをどう使っていくのか実践のレベルに落とし込む作業を頻繁に行う。本講義においては、発案を頻繁に求める。また、必要に応じてレポート課題や、グループでの作業を随時実施するつもりである。以上の点をあらかじめ把握しておいてほしい。

## 達成目標/Course objectives

情報機器や情報メディアの基礎的な知識を身につけ、その上で情報メディアを活用した授業の実践や児童生徒、教員に対する指導・助言ができる技能を身につけることを目的とする。

## 授業計画/Lecture plan

講義回	
1	授業計画 第1回 オリエンテーション・授業用CMSへの登録、情報メディアの定義について
	事前学習 学校教育における情報メディアの活用についてイメージを構築しておく。
	事後学習 情報メディアの定義について、授業資料以外、例えば学校教育の現場においてはどのような定義が用いられているかを検索しておく。
2	授業計画 第2回 学校図書館と情報メディア
	事前学習 学校図書館に関する基本的な内容について、事前配付した資料に目を通して確認しておく。
	事後学習 学校図書館で扱われているメディアが多様であり、具体的にどのようなメディアを扱う可能性があるのかについて、列挙できるようにしておく。
3	授業計画 第3回 メディアの性質と現状把握I：印刷メディアの性質
	事前学習 印刷メディアについて形式面でのような性質があるかを各自で確認しておく。
	事後学習 授業で触れた形式面の性質について、研究室や自宅などに置かれたメディアでどのようなになっているかを確認しておく。
4	授業計画 第4回 メディアの性質と現状把握II：印刷メディアと取次
	事前学習 事前に配付した資料を基に、日本の出版流通の過程には、取次というものがあることを確認しておく。
	事後学習 取次を含めた日本の出版流通の利点と欠点についてそれぞれ備わっているように考察する。
5	授業計画 第5回 印刷メディアの流通に関わるプレゼンテーション
	事前学習 各自でプレゼンテーション用の題材を設定しておく。
	事後学習 プレゼンテーションの結果を受け、各自で内容への理解や関心を深める。
6	授業計画 第6回 メディアの性質と現状把握II：電子メディア、インターネット
	事前学習 普段使っている電子メディアはどのようなものがあるか、列挙しておく。
	事後学習 インターネットを支える基本的な仕組みについて自分で説明ができるようにしておく。

7	授業計画 第7回 インターネット上の情報資源の把握と探索I：OPAC、サーチエンジン
	事前学習 OPACやサーチエンジンは、どのような情報検索をする際に使っているかを列挙しておく。
	事後学習 OPACやサーチエンジンの機能を把握し、どのような場面で活用可能なのかについて確認しておく。
8	授業計画 第8回 インターネット上の情報資源の把握と探索II：その他リソース
	事前学習 前回取り上げたOPACやサーチエンジンなどの使用方法を復習しておく。
	事後学習 ここまで得られたリソースからどのようなものがグループ演習で活用できるかを列挙しておく。
9	授業計画 第9回 電子教材を活用した事例の検討について
	事前学習 学校教育での電子教材の活用について、自分が把握している情報源から事例を検索し、1件は目を通してイメージを膨らませておく。
	事後学習 電子教材を活用した事例について、受講生の想から出たメモを見ながら、どのような点が自分の実践で活用できるのか考察を深める。
10	授業計画 第10回 情報モラル、著作権、知的所有権、ネットコモンズについて
	事前学習 各種Web上のニュースを見ながら、情報モラルや著作権に関する事件についてレビューしておく。
	事後学習 学校図書館とこれら情報モラルがどのように結びつくかを考察しておく。
11	授業計画 第11回 総合的な学習の時間と情報メディアの活用
	事前学習 総合的な学習の時間で用いられる学習帳の定義などについて学習指導要領の該当部分から確認しておく。
	事後学習 総合的な学習の時間において学校図書館がどのような取り組みが可能なのかを考察する。
12	授業計画 第12回 情報（教材）の作成と発信（CMSを用いた情報共有の方法）
	事前学習 授業で用いているCMSについて講師がどのような機能を活用しているかを確認しておく。
	事後学習 CMSの機能を用いて、グループ演習の発表でどのように活用できるか機能の詳細を確認しておく。
13	授業計画 第13回 情報メディアを活用した教育方法の提案（グループ演習）
	事前学習 各グループで良い題材にしたがって、事前準備をしておき話し合い円滑に進むようにしておく。
	事後学習 各グループでの演習発表が円滑に行くように、準備を進めておく。
14	授業計画 第14回 グループ発表・ディスカッション
	事前学習 各自でグループ発表の準備を行っておく。
	事後学習 他グループの演習結果を自分のグループの成果と照らし合わせ、どのような点を改善すべきかを把握する。
15	授業計画 第15回 まとめ
	事前学習 これまでの授業で取り上げたトピックについて、全般的にレビューを行っておく。
	事後学習 まとめを受けて、自分の理解していないところを再度確認し、復習しておく。

授業方法/Method of instruction

基本的に講義を進めるが、授業回によっては演習や受講者からの発表を中心に展開する回を設ける予定である。

## 成績評価方法/Evaluation

授業の参加（発案を頻繁に求める）とグループ発表ならびに授業時間外に取り組み課題（レポート）を授業点（40点）とし、最終試験（60点）と合わせて60点以上を合格とする。最終試験は定期試験期間に実施する。

## 教科書/Textbooks

（使用しない。随時資料を配布する。）

## 参考書/Reference books

一般社団法人インターネットユーザ協会編、『保護者のためのあたらしいインターネットの教科書—おとなの知らないネットの世界』中央経済社 2012。  
大向一輝・池谷瑞穂 『ウェブリサささを考える本—つながり社会のゆくえ—』丸善出版、2012  
その他、授業の進行に応じて適宜指示する。

## 授業関連情報/Class-related information

	件名/Title	内容/Contents	備考/Memo
1	授業CMS	<a href="http://library.halfmoon.jp/">http://library.halfmoon.jp/</a>	
2	授業用メールアドレス	<a href="mailto:a01602@librarian.jp">a01602@librarian.jp</a>	2016年9月1日より使用可

## メッセージ/Message

履修者は以下の事項をあらかじめ了解した上で授業に望むこと。

- ・授業進行の都合上、初回に受講者の座席を指定し授業用CMSに登録してもらう予定であるので、初回は欠席しないこと。教育実習等で初回に欠席せざるをえない場合は、授業開始1週間前までから移動予定（授業CMSサイト上の情報も参照のこと）の授業用メールアドレスへ可能な限り事前に連絡すること。
  - ・授業の連絡は電子メールで行う。携帯電話でもPCでもよいが、1日1回以上は必ずチェックする電子メールアドレスを用意すること。なお、トラブル防止のため、欠席や公欠等の申し出は可能な限りメールで行うことが望ましい（授業時に口頭で報告した場合には、転記ミス等が生じる場合がある）。
  - ・講義および演習は情報教室で行うのでアカウント登録等は事前に済ませておくこと。また、基本的な操作については事前に各自でフォローしておくこと。
  - ・携帯電話の電源は切っておくこと。邪魔活動などで電話を持つ場合には、授業開始時にその旨を教員に伝えること。（その場合には、マナーモードに設定し、電話が鳴ったら速速な上で通話すること。決して実習室内では通話しないこと）
  - ・授業進行上妨げとなるような行為を行わないこと。
  - ・欠席時のフォローは各自で行うこと。
- 履修登録を行った学生は、以上の事項並びに初回オリエンテーションの内容を承諾したと見なす。『講義内容』を読んでもないことが「初回授業に出席していないかった」という理由であっても、後日での異議の申し出は受け付けない。以上の事項を守らなかった場合、成績上不利な評価が行われる可能性があるため、十分に留意すること。

## その他/Others

一定回数以上（授業回数の3分の1を目途とする）の欠席（公欠ならびに教員の許可があった場合を除く）があった場合、最終試験の受験を許可しないので十分注意すること。

## キーワード/Keywords

学校図書館 司書教諭 情報メディア

こちらプリントのほうにも同じ内容が書いてありますが、ねらいは「学校図書館における多様な情報メディアの特性と活用方法の理解を図る」とありまして、内容の方を見ますと八この内容がでております。ただこれを見ていただいて、教育に携わってない方でも直感的に思うかと思うのですが、いくぶん古いような感じがいたします。例えば「視聴覚メディアの活用」と言った時に、VHS がもうなくなりかけて、今度、製造中止になりまして、ブルーレイ、CD、DVDの世界になっている。あとデータベースと情報検索の話というのが、今、インターネットとかなりごっちゃになっているところがあって、再現率と精度みたいな話はもうこれからも教えるべきなのかとか、いろいろな問題が出てくるところです。なので、文部科学省の規定なので少し前の時代にはなるわけです。ただ必要なトピックは私はちゃんと提示されているとは思っております。

この情報メディアと言った時にですね、一つ気になることといたしまして、この「情報メディア」の言葉の定義という事も毎回、学生さんに絡まれるわけです。先生、「情報メディアの活用」とあるけれども、情報メディアとはなんぞやというのも聞かれたりするわけなのですが、私としてはここはちゃんと研究者的に逃げた方がいいだろうということで、丸善出版から出ています『図書館情報学用語辞典』の定義を二つ出したうえで、情報もメディアも定義はいろいろあるぞという話をしてしまいます。情報も人によってかなり立場が変わりますと。例えば学校の先生なんかで情報といった瞬間、パソコンのことを真っ先に思い浮かべる人もいれば、新聞のことを真っ先に思い浮かべる人もいます、これ立場が変われば違うものを思い浮かべるのだから、図書館としては全部に対応できるようにしましょうねっていう話を上手くカオスな状態の話のまま、まとめます。そのうえでメディアの定義について、『図書館情報学用語辞典』の1番目の定義が情報メディアのことと定義されていて、これは循環の定義じゃないかと思うのですが、このまま情報メディアのことということにしています。このメディアの定義自体もこれも非常に立場が変われば…ある人は新聞を想像する、ある人はUSBメモリを想像して、ある人は図書館の本を想像するわけです。ただそれはそれとしてこれはいろいろな立場があるのだよということを先に提示しています。で、このいろいろな立場があるのだよ、というのが私の授業の中でも一つのキーになってくるので、この後も少し念頭に置いていただければと思います。

### 発表者と当該授業の関わり

- ・2大学で半期2単位科目として担当。
- ・集中講義としては担当していない。(→集中/非集中)

#### 想定しているレベル

・100の内容を教えて5割の学生さんが身につけることも大切。ただ、自分の担当授業では、80の内容に減らしても8割の学生さんが身につけるようにして欲しい。

#### 基本スタンス

・学生さんのモチベーションを高く保つてもらう。授業まで授業に参加してもらうことを目標にしている。  
・gentakuのブログ「教員の心算」から (<http://blog.gentaku.net/entry/201110081154818121>)

#### テキストについて

・テキストは使用していない。  
・内閣のアップデートが毎年出る。  
・更新されている最新の資料をつまみ取る(「リサーチ・リポート」)  
・必ず読まなければならない範囲が他の科目よりも狭い(「制作」のレポート、学生新聞の制作に集中させる)。

### 想定しているレベル

- ・100の内容を教えて5割の学生さんが身につけることも大切。ただ、自分の担当授業では、80の内容に減らしても8割の学生さんが身につけるようにして欲しい。

私の授業の様子なのですが、今までいろいろな大学で経験してきているのですが、司書課程、司書教諭課程の場合、講習の場合ですと夏期集中講義というのが大変多ございまして、私も「学校経営と学校図書館」、「学校図書館メディアの構成」、「学習指導と学校図書館」は集中講義で担当したことがございます。ただ「情報メディアの活用」に関しては集中講義では担当しておりません。よって基本的には15回の授業、毎週積みあげる形になりますので、私がこれから提案、提示する授業案、授業の実践というのは全て毎週毎週、そのあと翌週まで時間があるということが前提になっています。これが大変重要なところだと思うのですが、たぶん司書教諭講習で集中講義とこの通年、私は通年科目とか呼んだりするのですが、通年科目の場合、まったくやり方が変わるというのが私の印象です。15回の、集中講義で例えば4日間集中ですと、事実上15回できない、13回や12回程度に実質はなってしまうということもありますし、演習自体ができることが変わってくる、できることが変わってしまいますので、その辺はちょっと注意しておきたいなと思います。よって私の場合は通常期間の中でやっているということが前提です。それからこれは私が想定しているレベル、中村[百合子]さんが最初[本連続公開シンポジウム第1回]に出していただいた立教大学



のケースとだいぶ違って、私の場合はなんていうのでしょうか、難しい内容をそのまま提示するっていう、そのまま提示してわかってほしいという立場はもちろんとりたいのですが、どちらかと言うと 100 の内容を教えて 5 割が振り落とされるのだったら、80 の内容に減らして 8 割の学生が身につけて欲しいという態度を取っているんで、その点でいうとこれはしっかり申しあげますけど、授業のレベルからすると低いと思います。教えている内容自体の単語の数とかその深みに関してはおそらくもっと他の大学でやっているのはもうちょっと専門的なこともやっているでしょうし、もっとちゃんとしたことをやっていると思うっています。ただできれば、これは僕の意志ですけど、司書教諭をとる人間がこれはいいや、これは難しいから辞めたといわれると困っちゃうなっていうのがあって、それだったら全員がなんとかしてほしいなっていうのがあるので、だから私はレベルを少し下げていますよっていう話をここであげておきます。

## 基本スタンス

- ・ 学生さんのモチベーションを高く保ってもらい、最期まで授業に参加してもらうことを目標にしている。
- ・ gorotaku氏のブログ「教師の心得」から (<http://bluelines.hatenablog.com/entry/20110908/1315487472>)

それから基本スタンスですが、私、今これしゃべっててもおわかりかと思いますが、基本的に学生に偉そうに接しない、女子大に勤めてるっていうこともあるのですが、あんまり偉そうに接していないところがあります。たぶん私の授業をもしよかったらご覧になっていただければいいと思いますが、かなり譲歩しているというか、平身低頭です。かなり平身低頭な感じで、お前そこまでやらなくていいだろうっていう感じなところもあるわけです。私の用語、

見てもらえればわかると思うのですが、学生って絶対呼ばないのです。学生さんっていう言い方を必ずするのですが、わりとそういう丁寧な形をとらせてもらっています。これは理由があって、これ今日、プロの方ばかりなのでしゃべりますが、私がこれだけ最大限譲歩したのだから、できなかったら覚悟しとけっていう態度です。だから無断欠席したら私、ぱったり切ります。無断欠席して規定の回数超えたらああごめんねって言って、こんだけ言ってちゃんと警告も出したからねって言って柔らかにさよならするっていう感じですね。

私のこの授業のやり方っていろんな人からわりと聞かれるのですね、何かモデルがあるのですかって話をされるので、今日、参考資料で出していただきましたが、gorotaku 氏のブログ、「教師の心得」というプリントがございます。これアメリカの大学院の言語学のプロフェッショナル・メソッドという授業の中で実際に行われている 12 箇条の心得ということなのですが、これを見ていただければおわかりかと思うのですが、本当に学生のことをちゃんと認めているというか、なんというのかな、ある種バカにしていないところをかなり強調しているものです。私は正直、今の本務先、もうこれで 4 年目なのですが、本務先 1 年目の授業がはじまる前にたまたまこのブログ記事を見つけて、これ真似して上手くいったら面白いなっていうことを考えて真似してみたら意外と上手くいったので、そのまま 4 年間これでやらせてもらっています。なので、私の授業のモデルっていうのはだいたいそこにあるので、あとでご覧になっていただければと思います。

## テキストについて

- ・テキストは使用していない。
- ・内容のアップデートが毎年生じる
- ・前提とされている条件が5年経つと大きく変わる（PC→ケータイ→スマートフォン）
- ・必ず覚えなければいけない知識の範囲が他の科目よりも曖昧である（著作権のルールでさえ、毎年解釈が微妙に変わってくる）。

この授業、「情報メディアの活用」の授業を扱う時に、テキストを使っていないのです、私、ずいぶん長く使っていません。これ、理由がけっこういろいろありまして、まず内容のアップデートが毎年なのです。著作権関連は年によって教えるべきことがどんどん変わっていくのです。例えば私がこの「情報メディアの活用」、今、青山学院では、2009年のころから授業をもっているんですけど、2009年のころだと音楽CDのコピーコントロールの話を著作権の話ですと

ちょうどトレンドだったのですが、もう今2015年だとかなり古いですね。古くなっていて、コピーコントロールどころかコピーコントロールCDですらなくなって、Amazon Prime Music、Apple Musicみたいな話になってくると。そうなった時に教科書に著作権の話がでているのですが、やっぱり残念ですが、これはテキスト作っている方のご苦労もよくわかっているのですけれど、正直、使えないです。自分で資料差し替えないと使えないところがあります。またウェブサイトをたくさん取りあげてくるのですけれども、一番よくわかりやすいのが2009年の最初のころ、学校の授業で使える教材、動画とか画像とかを取りあげていたものがあります。そのサイト、組織改編で消えましたみたいなことが普通にあるので、なので私はテキストは一切使っておりませんので適宜資料を使ってやっています。一つ重要なこととしては、今、前提とされている条件がだいぶ変わってきているように思います。最初のころ、大学生が入学時にパソコンを買うのが当たり前だったのが、携帯になりました。今、普通にiPhoneですね、本務先で普通にiPhoneのフリック入力で頑張っている私のレポート打ち込んでいる学生を何人か見かけたりするくらいなので、そうなってくると実は教科書、特に情報メディア活用の教科書はパソコンが前提となっているので、これはどうかなっているのはあります。かつ、必ず覚えなければいけない知識の範囲が他の科目より非常に曖昧です。私のこれは印象ですけど、NDCを覚えなさいとか、学校図書館法を覚えなさいっていうのは、簡単に言うと試験に出しやすいのです。記述式の試験でも答えやすい問題が出せるのですが、じゃあ学校図書館の今後、学校図書館員が今後、身につけるべき著作権とは何ぞやっていう問題をもし出したら、毎年答えが変わると思います、僕は。毎年そこは編集されているところで、このあたりがややこしいぞといったところなんです。こういうちょっと前提を置いていただかないと、ちょっと私の授業は少しズレてるように見えるかもしれないので、そのあたりはちょっと押さえておいていただければと思います。時間が限られていますので、ここからは簡単にいきます。

私の授業実践ですが、基本的には青山学院大学のこのシラバスをご覧になっていただければと思います。この資料のところですね、見ていただくとちょっと他の授業とだいぶ違うのは、「情報メディアの活用」の1回目からいきなりパソコンの授業、パソコンを使わせてウェブページの話をしきなりやりたいところなのですが、私はあえて印刷メディアの性質という「学校図書館メディアの構成」でやる内容を入れています。印刷メディアの性質の中で、実は「学校図書館メディアの構成」で時間的にできないものとして、取次の話があるんですね。取次とか書店の話は一切できないので、あえてここに入れています。実は授業計画の5回目のところに印刷メディアの流通に関するプレゼンテーションっていうのがありますが、これ実際に自分の気に入った本屋さんを一こ選んできて、写真とってプレゼンをやるって

うことをわざとやっています。わざとこう印刷メディア、べたべたの話をやった後であえて電子メディアをやっています。だから電子メディアと印刷メディアの何が違うのかっていう対比をわざとさせているので、人によってはたぶんこれ「学校図書館メディアの構成」でやるよっていう話をわざとやっております。

### 「情報メディアの活用」実践について

- 基本的には「学校図書館メディアの構成」や「学習指導と学校図書館」とわざと連携させている。
- 例えば、出版流通や、メディアを使った指導案がその例である（シラバス参照）

授業で扱う内容（１）

お気に入りの本屋を取り上げる課題  
出版流通を取り上げながら、お気に入りの本屋を1つ紹介するショートプレゼンテーションを行う＝発表が終わった後、図書館と対比させる。

授業で扱う内容（２）

「メディア」を使った指導案  
授業の冒頭でIPAのDVDから「同志社国際中学校・高等学校」の事例を見せて、情報メディアの定義は多様であることを確認する。

授業で扱う内容（３）

その上で、“「メディア」を4つ以上活用した指導案”を“グループで”作ってもらう。

### 授業で扱う内容（１）

- お気に入りの本屋を取り上げる課題
  - 出版流通を取り上げながら、お気に入りの本屋を1つ紹介するショートプレゼンテーションを行う＝発表が終わった後、図書館と対比させる。
- 「メディア」を使った指導案
  - 授業の冒頭でIPAのDVDから「同志社国際中学校・高等学校」の事例を見せて、情報メディアの定義は多様であることを確認する。
  - その上で、“「メディア」を4つ以上活用した指導案”を“グループで”作ってもらう。

### 授業で扱う内容（２）

- 教育用ソフトウェアについて
  - プログラミングツールを教えることも可能だが、大学の施設に依存しやすいので、NHK for schoolなど使えるWebサイトをあれこれ閲覧させて評価させるに留まっている。
- 著作権について
  - 日本書籍出版協会の読み聞かせ著作権、クリエイティブ・コモンズの動向も踏まえ、マナーや教訓的な「できないこと」を押しつけるのではなく、マナーを守った上でできることは何かを考えてもらうようにしている。

### 授業で扱う内容（３）

- 情報検索の授業では、検索アルゴリズムをコンピュータサイエンスアンプラグドの「戦艦ゲーム」を使いながら教えている。
  - <http://csunplugged.jp/>

もう一つ、「学習指導と学校図書館」の授業をおもちの方でしたら、たぶん学習指導っていう話が入っていますので、じゃあ演習として指導案を書きましょうとか、授業案を提示してみましょうとかということを考えて思うのですが、私、実は「情報メディアの活用」でこれをやっています。メディアを使った指導案っていうのを作っていて、まず先ほど申しあげたとおり情報メディアっていういろいろですよって話を最初にしたのですが、あえてその情報メディアがいろいろだということをそのまま引きずっておいて、じゃあ情報メディアについてとりあえず四つ、四つというのは別に4点っていう意味ではなくて、4種類でもいいのですが、とにかくいろいろなメディアを使った指導案っていうのを作ってみると、実現できるかどうかは別として作ってみてください、それを1人じゃなくてグループであえて作ってください、指導案って普通、個人で作ることが多いのですが、グループであえて作るということをやらせています。そういうことをしながら普通の「情報メディアの活用」だと、たぶんプレゼンテーション、PowerPointのプレゼンテーションとかホームページ作りますって課題が最後にくることが多いと思うのですが、あえてそれを指導案という形でなんというか、学校現場に使える形で落とし込んでやるということをやってもらっていますので、いくらか不思議な授業になっているかと思います。



そういうことで他にも教育用ソフトプログラムで、プログラミングツールとかを教えて、プログラムをやらせる授業をやっている先生もいらっしゃると思うのですが、ただこれは大学の設備に相当、依存するので、例えば Windows しか置いてない、Windows の Word と Excel しか使えないとこだとできないので、私の場合は NHK for School とかの使えるサイトを見せて評価させるくらいに留まっています。著作権についてはこれ毎年、実はいろいろ変えています。最近では日本書籍出版協会の「読み聞かせ著作権」、ご存知かと思います。日本書籍出版協会を読み聞かせる時に、どういう著作権の許諾をとる必要があるのかっていうのをチェックリストとして出しているの、それを見せたりとか、ご存知かとは思いますがクリエイティブ・コモンズというのが京都府立総合資料館とかその他諸々のところで地域史を紹介する時に使われだしたはじめてなので、そのあたりの話を取りあげつつ、教育の中でできないことを押しつけるのじゃなく、マナーを守ったうえでできることは何かっていうことをやってもらっています。そういうことなので、かなりこのあたりは毎年、いじっているということです。他にも情報検索の授業で検索アルゴリズムの話をするのですが、コンピュータサイエンスアンプラグドといって、コンピュータを使わないでコンピュータ教育を行うというものです。その中に戦艦ゲームという、与えられたヒントから相手の船を見つけ出すゲームがあるのですが、これは検索アルゴリズムの知見が用いられているゲームです。結構、このあたりも含めて他分野の知見も使わせてもらっています。というわけでかなりいじっています。たぶんスタンダードな授業よりは中身は変えているぞということなんです。

**新しいメディアとつながる授業実践**

**Twitterを用いた大学間授業実践**

- ・詳細は下記論文を参照。
- ・<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008723198>
- ・2大学の時間帯が異なる授業をTwitterを用いて疑似的に連携させた実践。
- ・電子書籍に対する態度などを2大学間で取り出した。
- ・新しいメディアを取り入れやすいことから実現に至った授業である。

**環境教育データベースを使った指導案**

- ・本務先で構築した環境教育データベースを「情報メディアの活用」で実施している指導案作成に活かした例。
- ・色のコードや名前を使って、算数の表やグラフ作成や、総合的な学習の時間の指導案を作る例が見られた。
- ・詳細は、下記プレゼンテーションファイルを参照のこと。
- ・<http://bit.ly/JASL2016-10A1>

2年に1回程度でも、授業実践について公表していくことが必要だと思っている。

**Twitterを用いた大学間授業実践**

- ・詳細は下記論文を参照。
- ・<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008723198>
- ・2大学の時間帯が異なる授業をTwitterを用いて疑似的に連携させた実践。
- ・電子書籍に対する態度などを2大学間で取り出した。
- ・新しいメディアを取り入れやすいことから実現に至った授業である。

他にもこの授業に関しては毎年かなりいじってまして、例えばある年ですと、Twitterを使ってとある大学と大学間の授業連携っていうのをやりました。電子書籍に関する授業をやったのですが、ある大学の授業中、受講生にTwitterを使わせてその授業を実況させ、それについての感想を述べてもらう。それを3日くらい離れた青山学院大学で一回引き取って、じゃあ同じ授業をやってどうなるかっていうのを、受講生同士でコミュニケーションできるかなっていうことをやってみました。新しいメディアをこの授業は取り入れやすいので、こういうことを入れてみたりもしました。あと本務先のほうに環境教育データベース、例えば修道院のところに杉林が生えていましてとか、どこにどういう植物が生えているっていう、そういう環境教育データベースっていうのが本務先で構築されているのですが、それを使ってさっきの指導案を作るなんてことも過去にはやっています。詳細に関してはプレゼンテーションファイルを公開していますのでご覧になっていただ



#### 環境教育データベースを使った指導案

- ・本務先で構築した環境教育データベースを「情報メディアの活用」で実施している指導案作成に活かした例。
- ・色のコードや名前を使って、算数の表やグラフ作成や、総合的な学習の時間の指導案を作る例が見られた。
- ・詳細は、下記プレゼンテーションファイルを参照のこと。
- ・<http://bit.ly/IASL2016-IMAI>

ければと思います。いちおうこういうのが私、原則、授業実践はなるべく公表するようにしています<sup>2)</sup>。これはちょっと、いくぶん挑戦的な、挑発的な言い方になるかもしれないのですが、授業実践は外に出すつもりでやらないとやっぱり内向きになるっていうことを考えているので、なるべく2年に1回程度は公表するようにするには心がけています。できているかどうかはまた別として。

#### 論点提示

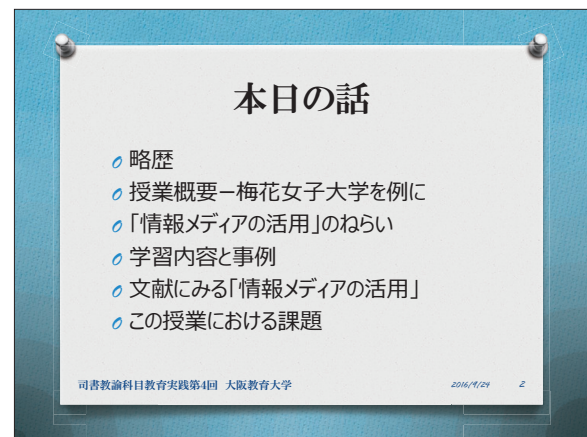
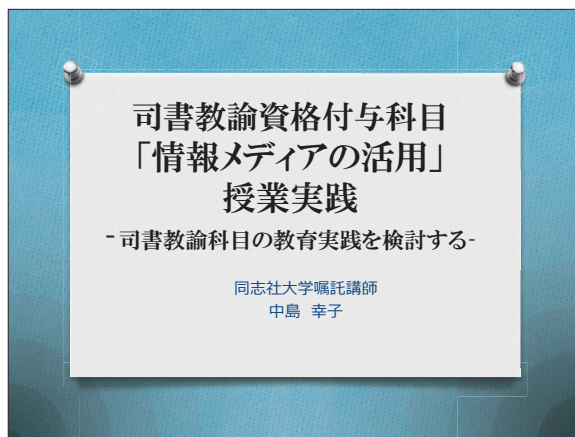
- ・他の司書教諭講習科目との差異化
- ・大学の初年次教育と何が違うのか。
- ・教員養成課程の情報科目と何が違うのか。
- ・どの程度の新しい内容を盛り込むべきか、
- ・テキストブックは成立するのか。
- ・今後どの程度、ICTは学校現場に普及するか
- ・ICTはどの程度学校図書館に入ってくるか
- ・ICTに興味を持つ教員は味方になれるか

ということで、かけ足でしゃべってきたのですが、最後に私の方からこのシンポジウムで考えるときの論点を出しておきたいと思います。八つございます。まず他の司書講習科目と比べてこの科目に関してはたぶん位置づけが迷ってらっしゃる先生が多いんじゃないかと思っています。「学校メディア図書館の構成」は分類と目録というキーワードもできますし、「学校経営と学校図書館」は法令とか制度とかすればできます。あと「学習指導と学校図書館」はと

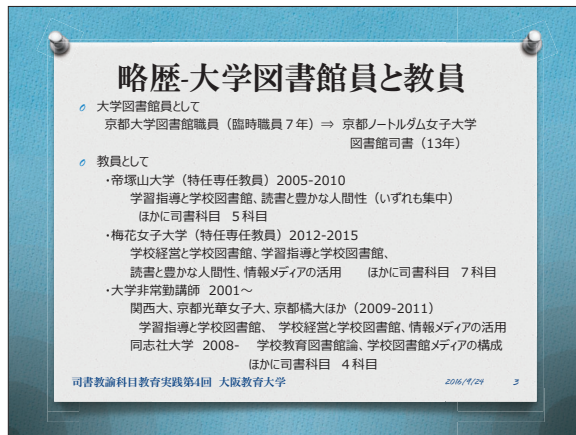
にかく授業をどうするか、実践をどうするかっていう話になりますし、「読書と豊かな人間性」は読書サービスみたいな話ができるのですが、「情報メディアの活用」っていうのが、僕、正直、今ずっと授業、これでも8年くらいやっていますんですけど、まだわかりません。まだこれさえ教えればいいっていうキーワードが私の中ではできていません。それからちょっとここからは深刻な話ですが、大学の初年次教育で情報リテラシー教育を行っている大学が多くなってきました。そこでアカデミック・ライティングとか、このデータベースを教えるとか、著作権の話はあらかじめ教わっている学生が結構、出てきています。前にあったのですが、先生、その話1年生の時に聞いたっていうのをあからさまに言われたことがあります。要するにWebサイトの使い方とか検索の仕方とかインターネットの仕組みとかを教えたなら、それもう話聞いていますわっていう態度をとられたことがあります。かなりこれはバッティングしていると思うのです。目的は違うと思うのですよ。大学生個人が使えるようになるのと、司書教諭になる人が、それを使いこなして教育するっていうのは意味が違うのですが、実際、やっている内容がかなり重なっているような気がします。さあどうしよう、ということ。それから教員養成課程においても情報教育科目を設ける科目も出てきます、さあどうしましょうか。これはかなりバッティングします。という話。それから次です。4点目です。新しい内容をどこまで取り組むべきか。たまたま私は興味をもっているいろいろな関心をもっているの、いろいろなことをやっていますが、たぶん教えている中の方には、これは私、別にそんなにキャッチアップしたくない内容だな、要するに追いつきたくない内容だなんて思っている人にとってみれば新しい内容に取り組むって結構、大変なところで、どのあたりまで取り組むべきかっていう問題がある。それからテキストブックが成立

するのかといえば、僕はちょっと成立しないと思っています。これはかなり理解があります。最後の3点です。これは今日、現場の方が来ていらっしゃるなので、あえて入れましたが、学校現場の中でどのくらい普及するか、正直、「情報メディアの活用」の教科書は古いって言いましたけど、残念ですが、学校図書館現場を見るとあのテキストの内容ですらまだ実現できていない。パソコンすら入っていませんとか、無線LANは飛んでますけど、私たち使えませんとか、それこそパソコンはどこか鍵のかかった部屋に30台まとめて置いてありますとか普通にあるので、困っています。さあどうしましょうかということ。それからICTがどれだけ学校図書館に入ってくるか、教員はそれに対してどれだけ味方ができるかという、すごくそういう現場の乖離っていうのが問題になってきています、問題になってきていると僕は思います。さあこのあたりをどうしましょうかという論点を提示して私の話は終わりたいと思います。ありがとうございました。

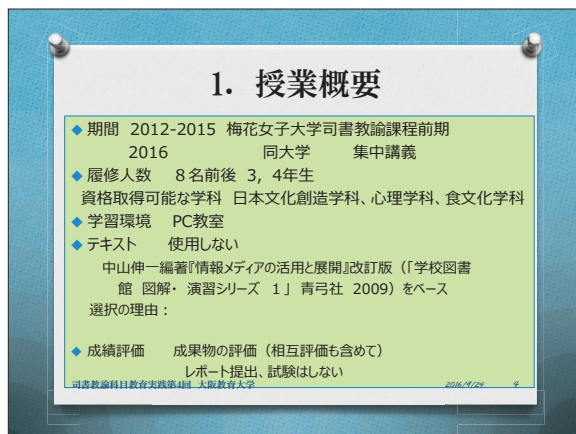
### 中島幸子「司書教諭資格付与科目「情報メディアの活用」授業実践」



こんにちは。今、同志社大学で嘱託講師をしています中島幸子と申します。今年の3月までは梅花女子大学で司書課程と司書教諭課程を担当しておりました。今、今井先生のを…非常にスライドからしてちょっと雰囲気のある。私のはこのように大変、普通のお話になります。私も「情報メディアの活用」というのは梅花女子大学で4年間、その前に少し非常勤で2年間くらい教えた程度で、実は五つの司書教諭科目では一番、私が教えていない科目がなにかこうあたってしまって、ちょっと中村[百合子]先生が誤解されていたみたいで(笑)。それで今日の私の授業を本当に実践、こんなことをしていますよっていうことを皆さんに実際に見ていただいて、そしてどんどん、いや、こんなんではダメってご意見をいただきたいと思います。ですからメディアの活用のねらいとか、私が思っているねらいとか、それから実際に学生がいろいろ作ったものをお見せしたりして、それからにわか仕立てで「情報メディアの活用」についてのことを文献で調べましたら教科書の比較っていう論文が二つ出てきました。それで今井先生がおっしゃいましたけれど、情報メディアとはどういうことをカバーしているのかを皆さんと一緒に考えたいと思います。そしてこの授業における課題というふうに進めていきたいと思っています。



として司書教諭科目を教えていいのかどうかというのをいつもすごく反省しているというか、恥ずかしいなって思うときもすごくありまして。ですから今日、司書教諭科目のプロの方ばかりなので、発表お引き受けしなかった方がよかったかなって、いささか緊張しております。ですから「情報メディアの活用」は梅花の場合とそれから京都光華女子大で教えた程度で、他は司書教諭科目を教えているのですけれども、「情報メディアの活用」がなぜか外れていましたので、そういう経歴です。

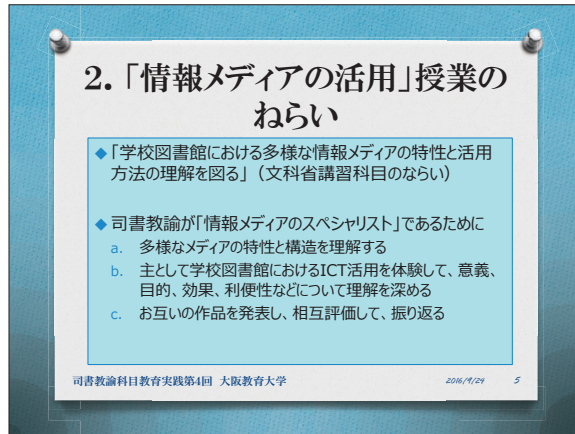


授業概要は梅花女子大学の2012から4年おりましたので、特任でしたので4年でした。4年間、前期科目で15回の授業ですね。今年3月に退職したのですけれども、今年をもってほしいと言われて、はじめて集中講義で「情報メディアの活用」をやりました。前期科目でやったのとはほとんど同じことをやったのですが、今井先生も言われたように、集中講義で前期科目の内容をやるっていうのはちょっとしんどかったですし、学生もちょっと頭、混乱したかも

しれませんけれども、あとからはね。私、本当に演習というか実習を主にしていますので、集中講義でも退屈はしなかったみたいです。履修人数が梅花の場合はちょっと少なくて司書教諭科目自体が、司書は60人くらいいるのですけれども、司書教諭は教職が少なくなってきました、その中でも司書教諭まではっていう人が少なくて、その代わりこの8名前後っていうのは非常に熱心な学生が多かったです。梅花の場合、教職科目と司書教諭科目は関連してないのですね、読み替えとかいろいろしてないので、教職をとってすべて教職の40単位か何かをとって、プラスアルファで10単位をとらないといけないので、学生にとってはかなりの負担みたいです。テキストですけど、私も2年くらいはこの『情報メディアの活用と展開 改訂版』（中山伸一編著，青弓社，2009）をやったのですが、中身の方がやっぱりだいぶ古くなりましたので、最近ここ2年はまったく使用していないのですが、ベースにしています。あ、すみません、選択の理由を書かないといけなかったのですが、「学校図書館図解・演習シリーズ」ということで、本当にいろんなことを自分で実践しようっていう内容でしたので、他のものちょっと見たのですけれども、わりあい図が多くて、わかりやすい感じでしたので、「情報メディアの活用」はこれでいこうかなって思いました。です

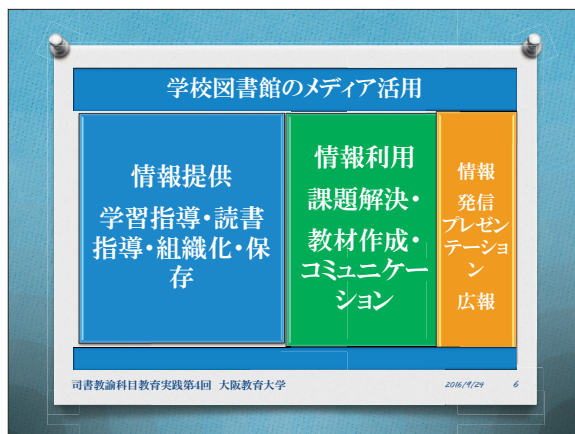


から成績はレポート提出とか試験はまったくなくて、その都度、その都度の成果物をみんな、私も評価しますが、全員で発表してみんなで評価するっていう、8名なのでたぶんそういうことができたと思うのですよね。これが20人とかいたらとてもできない内容なのですけど。

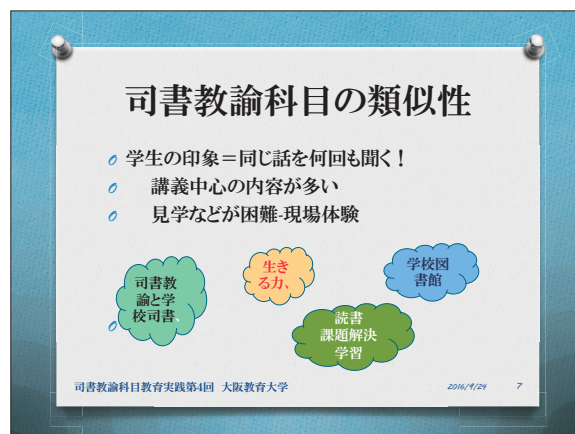


ねらいは今井先生がおっしゃったので、文科省の講習科目の概要に倣っています。私が特に強調したいのは司書教諭が情報メディアのスペシャリストであるということ意識してほしいなということで、ですから多様なメディアの特性と構造を理解して、そして学校図書館におけるいろんなICT活用を自分で体験をして、そして目的であるとか効果であるとか利便性とかそういったことを、自分でそれを作ることによって実際にシミュレーションをするというか、そ

ういう形を考えてもらいたいなと思っています。それからもう一つはお互いにみんなでそれの評価し合って、自分がどうだったとか、それから自分の作ったものにアドバイスをしてもらうとかそういうことも目的にしています。



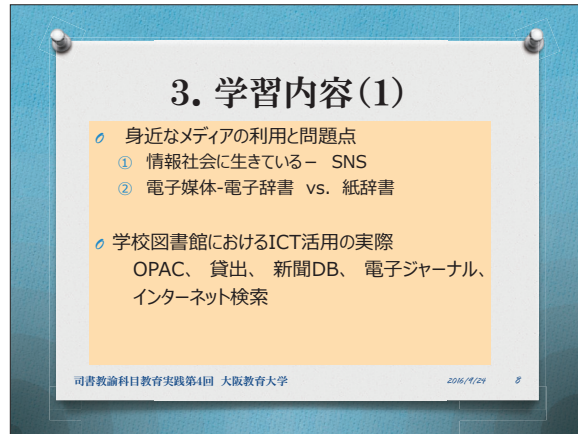
「学校図書館のメディアの活用」と言いますと、どうも5科目の中では提供とか利用とかそういうところがかなり重きを置かれていて、発信するっていう、自分で情報を発信するっていうそういう面がわりあい少ないのじゃないかなっていう感じがしています。それから学校図書館としては広報ということも非常に大事なので、図書館が利用者に対してどういうふうに提供したらいいかっていうことも考えてほしいということをやっていました。



これはここにいらっしゃる方を前にそんなこと言っでは、そんなことないよっていわれると思うのですけども、実は私、梅花女子大では4科目を担当したのですね。ですから学生は同じような話が何回も出てきて、先生その話どっかでまた聞いたよとかって言われて、実際、司書教諭とか司書ってどの教科にも出てきますし、もう「生きる力」とかいろんなところで言いますし、「課題解決」とかもこういう言葉とかが、学生の中でごっちゃになって、いったいこの科目は

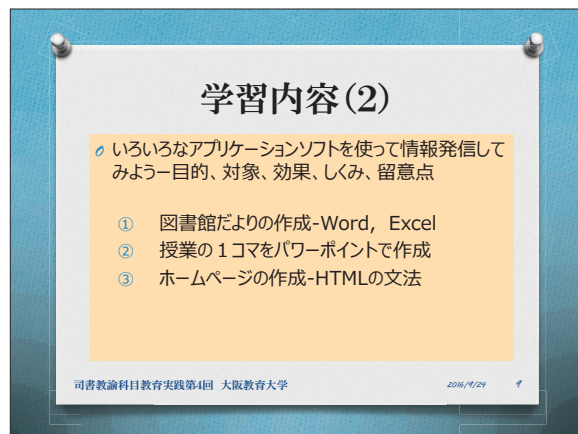


何を勉強したのっていうのがわからないというか、今井先生も他の科目との差異化っていうのを言われたのですが、この5科目っていうの、こう学生にわかりやすく区別する方法がないかなって4科目も担当しますと自分の中でもちょっと整理し切れてないところがあるので、よろしくお願いいたします、アドバイスを。



ここからなのですが、15回ということで、試験もしませんので、本当に15週目いっぱい使っているのですが、一番最初はそのメディアっていうので、自分たちが一番身近なメディアを、日常生活に使っている「メディア」ということで、そのSNSとかそういったことで何か困っていることはないとか、問題はないとか、それから教育委員会から出ているようないろんなチラシなんかも皆さんに見せたりして、非常に問題も多いよねっていうようなこと

を話したり。それから電子媒体の話の時に電子辞書と紙辞書はどっちがどうか、そういうことを簡単にディスカッションさせたり、ディベートまでとはいきませんが、させています。そして学校図書館にはどんなICTの活用があるかということで、自分たちの学校図書館体験が学生の学校図書館体験は非常に個人差がありますので、OPACを知らない、OPACが学校図書館になかったっていう人もいますし、電子ジャーナルも大学に来てはじめてとか、大学図書館でもあんまり行ってない人もいますので、司書教諭の科目の中で司書課程を取っている人が8人のうち2人ぐらいなのですね。あとは教職と司書教諭だけなので、図書館もそんなに知っていないという人が。いちおう学校図書館の実態を説明します。



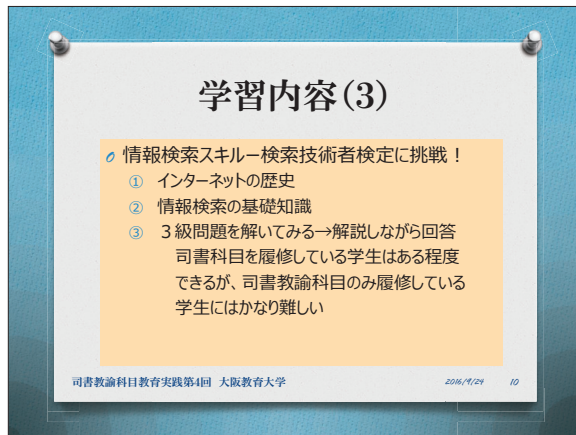
ここからなのですが、情報発信をしてみようということで、まず図書館だよりを作成し、それから授業1コマ、全員が教職を取っている人たちなので、梅花の場合は、自分の教員免許の科目っていうのが非常に意識の中にありますので、ちょっと3年生でまだ前期科目ですと、まだその指導案も書いてないし、ちょっとキツいところがあるので、4年生だったらもう結構、パワーポイントでやってくれるのですが、それを作り、それからホームペー

ジをHTMLで、今井先生が言われたので、こういうことは情報でやっているし、大学の初年次教育で情報やっているからって今、そういうご意見あったので、確かにそれもあるのですが、大学によってやっぱりだいぶ事情が違うのですよね。梅花の場合も情報の科目、1年生で必須であるのですが、もうほとんどWordとExcelとPowerPointぐらいで、HTMLも作ったことあるっていう人とまったく、知らないっていう人が半々ぐらいですね。ですからこれ、私の授業、たぶんあと10年ぐらい、もう私はいませんが、10

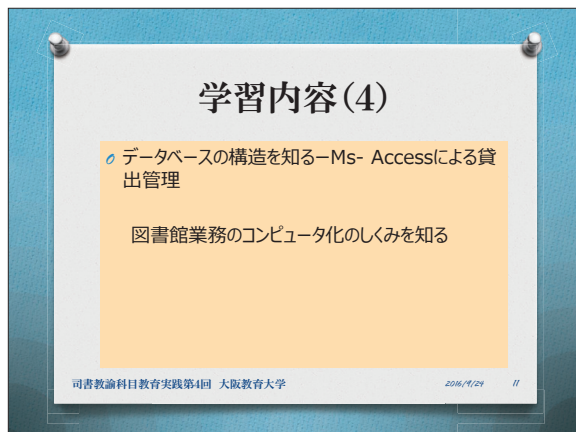
年くらいしてデジタルネイティブの人たちが入ってきたらこんなことする必要ないかなって、それも一つはあるのですけれど、ですけどやっぱり目的とかいろんなそのなぜこういうものを図書館から発信しなくてはいけないのか、なぜ授業で PowerPoint を使わなくてはいけないのかというようなことを考えるっていう意味では、いくらさらさらと作れてもと思うのですね。

これ三つ全部ちょっと、一つずつお見せしますけれども、全部が全部が図書館のテーマではないので、図書館だよりはそうなのですけれども。図書館だよりはこれ今年の、いちおう Word と Excel なので必ずこの利用状況という形でいったら、表を必ず入れることと、それからグラフを作るっていう、これを必ず入れること、それからトピックスもみんな図書館だよりってどんなものっていうイメージもそんなにすぐわく人ばかりではありませんので、ですからだいたいこの項目ぐらいは私が指定をしています。そういうのをレジュメでちゃんと渡して、レイアウトも全部、自分で書いて、トピックは何か自分で考えなさい、グラフと表を Excel で貼り付けるから、何でもいいのでそういう統計をどこからでももってきてもいいし、自分でやってもいいしって言って。それとあと新刊情報も入れるようにしますって言って。これは別に中学・高校でなくっても、これは梅花の場合の大学の図書館でもいいよっていうふうに、校種の指定はしていないのです。要するに図書館だよりということで図書館からどういう発信をするかっていうことを考えて作ってもらえたらいいですっていう感じなので、ですからこの人みたいに上手く綺麗に表挿入もできない場合もあります。ですからそういうふうになかなか Word を使って図書館ニュースしましょうって言うても、そんなにずっとできる人は、そんなにはいないと私は思ったのですけれどもね。

それから PowerPoint ですけれども、これはこんな感じで、ここ日本文化創造学科って、国文に近い学科なのですけれども、自分がする授業の中で『羅生門』っていうふうな感じでこんなふうに自分で。ですから自分の、授業の全部じゃなくて、これをどこの部分に入れるかっていうことも考えて、導入部に入れるなら導入部っていうふうにその入れるところも考えなさいって言うことは言っています。単に作るだけではなくて。それからホームページは、これはね、図書館のホームページにしようかと思ったのですけれども、ちょっとそれはなかなか難しそうなので、ホームページは自分の興味の範囲でいいよっていう、何でも、自分のペットでもいいし、趣味でもいいし、だからクラブのことやる人とかペットをやる人とか、それから自分の好きなお菓子のことやったりとか、そういうので、ただしホームページにもすべて必要な条件はすべて指定してあります。色、バックをつけること、それから文字のフォントを変えること、それから必ず画像を入れること、それから表をつけること、そしてリンクを貼ることっていうふうにやりますので、だいたい作ったことのある人はざっとこのくらいは作るのですけど、やっぱりはじめてという人も 2、3 人はいるのですよね、HTML を作ったことがないという人もいたので、かなり細かく言ってあげないとなかなか作れないっていうのがありました。ですからホームページに関しては、すみません、自由にしています。



それから情報検索のスキルですけど、これはインターネットの歴史とそれから「情報検索の基礎知識」をまずは利用して、そして最後の30分か40分くらいで二こ下の三級問題をいちおう解いてもらいます。これも司書課程の人は結構、解けるのですが、司書課程を取ってない人はやっぱり相当難しいって言っていました。



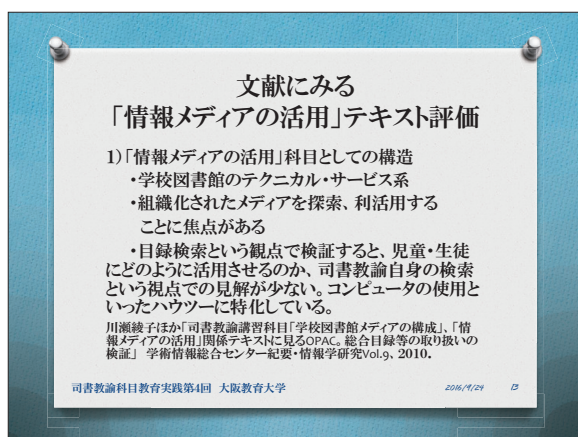
それからもう一つ、このMs-Accessなのですが、これは図書館のシステムの模擬というか、ミニチュアみたいな感じでやっているよってということで、いちおうこういう貸出フォームとか返却フォームとか、それから貸出中リストとかそういうのを一から作ります。プリント渡して、もう本当にテーブルから作ります。図書テーブルを15冊くらい自分で書誌をばーっと取ってきてとか、それから利用者テーブルは5、6人でもいいから自分の友だちの名前でもいいしっ

ていって。貸出フォームでこれであの自分で作って、それで書誌から例えば1番というふうにここに、書誌IDのところに1番と入れますと、書名が出てきて、そして利用者番号のところに例えばAの100って入れたら、ここにAの100って入れたら、そうするとここで名前がでてくるっていう、だからリレーションシップとかSQLまでは説明しませんが、リレーションシップというものをちゃんとこういうふうにするとリレーショナルデータベースっていうのがこんなふうに見えるのよっていうと、これに関していうとやっぱり学生はOPACとか使っていて、こんなふうの中身、裏側はなっているのだからっていうので、結構、反応があって。私はだから図書館に行ったら図書館のデータベース、図書館のシステムを司書教諭でもやっぱりね、こういうふうにした方がいいよっていうようなアドバイス、希望をシステムの人とね、ちゃんと話ができるような、これだけ作ったからってシステムの人と話ができるとは思いませんけど、まったく裏側知らないよりは私はいいと思って、そうすると学生は本当に貸出中図書リストのところにもちゃんと反応するので、なるほどって、すごく思ってくれるところはありました。



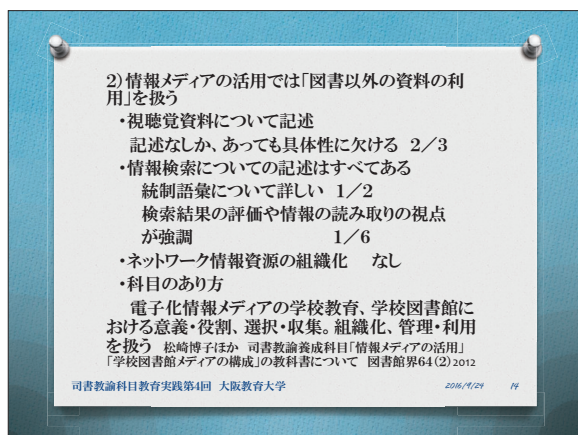


それからデジタルコンテンツはNHK for School を私も使っています。いろんな、自分で、自分の専攻に関する番組を選んで、そういう番組の評価をさせたり、それから著作権に関しては基礎知識として、いちおう概略は言うのですが、この「マンガでわかる著作権 [の利用]」っていうのが出ているので、それでクイズ形式になっていますので、実際の場面で知識としてもっている必要があると理解してもらいます。



この文献なのですが、二つだけ。「情報メディアの活用」科目の構造というのでは、北[克一]先生のところで、川瀬[綾子]さんが学校図書館のテクニカル・サービスというふうに位置づけていて、そして「学校図書館メディアの構成」は組織化だけでも、メディアの活用は組織化されたメディアを探索、活用することで、それでその司書教諭自身が縦横に探索できるっていうことを目指している、それを児童・生徒にどう教えるかっていうことを目指しているの

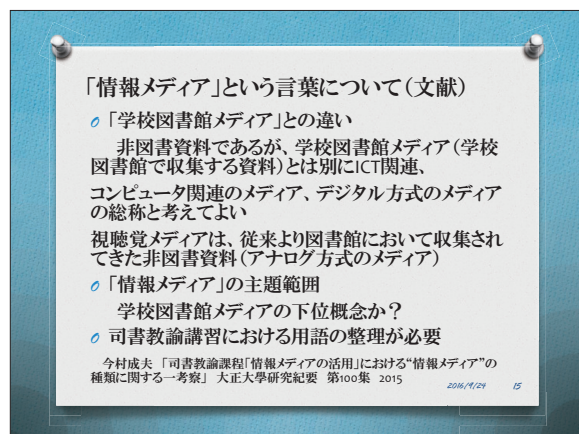
が「情報メディアの活用」の意義だというように結んでおられますので。だけど実際はhow to化に、コンピューターの使用のhow to化に特化したものが教科書に多いっていうふうにちょっと批判的でした。



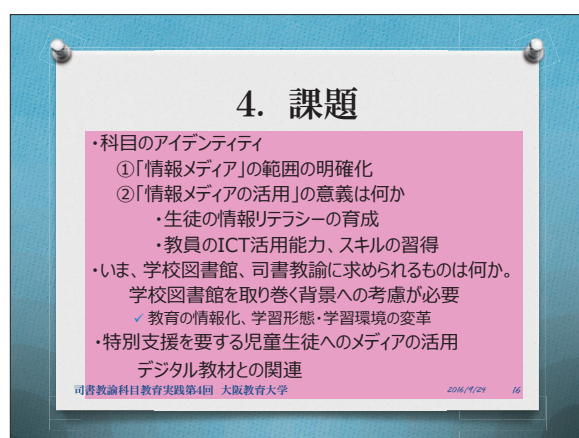
松崎[博子]さんなんかも「情報メディアの活用」の教科書の比較なのですが、これは視聴覚、言語、ちょっと言葉の比較をされていて、視聴覚資料という記述がないとか、情報検索については統制語彙についての記述が非常に漏れているとか、そういうような比較をされて、結局、この「情報メディアの活用」というのは科目としては電子化情報メディアの学校教育、図書館における意義、役割、選択、収集、組織化、管理、利用を扱うっていうふうに、学校図

書館メディアの活用っていうのを、資料の区分けで分けたらどうかっていう提案をされていました。

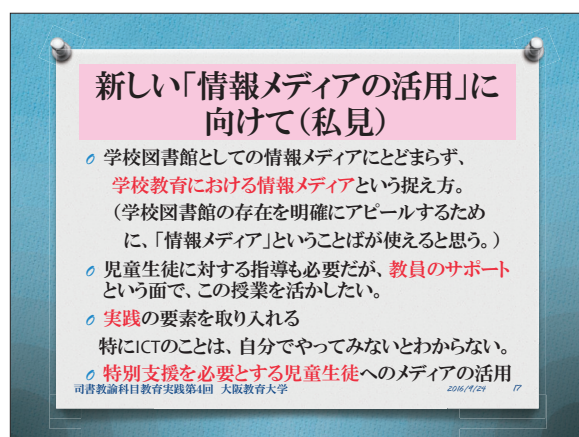




学校図書館メディアの違いつていうので、今村[成夫]さんという方が調査をされて、非常に多くの観点における調査をされているのですが、やっぱり情報メディアっていうのは、学校図書館メディアの下位概念になるのじゃないかっていうふうなことで、それから学校図書館メディアと情報メディアといろんな言葉がその科目によって入り乱れているから、やっぱりそこは調整、整理する必要があるのじゃないかと。「学校図書館メディアの構成」の中には情報メディアという言葉があんまり出てこないらしくて、っていうそういうことをおっしゃっています。



課題なのですけど、私もやっぱりこの情報メディアっていう範囲っていうものをもう少し明確にして、この活用をなぜここで教えないといけないかっていう、情報リテラシーの育成を教えるのか、教諭の活用能力を重きにするのかっていう、もちろん両方だと思うのですが、ですけどやっぱり図書館が非常に変わっていく必要があるし、学習形態もアクティブ・ランニングとかいろいろなことでインターネットを入れていくとかいろいろありますので、それに学校図書館が対応していくっていうのは絶対、必要だと思います。それからもう一つ、これは私の反省なのですが、特別支援を要する児童・生徒のメディアの活用っていうのもここで、デジタル教材とかいろいろなマルチメディア DAISY とかそういうのも全然、今はやっていないので、それはやる必要があるんかなって。



ですから、学校図書館としての情報メディアっていうよりも、学校教育全体の情報メディアっていうふうにこの情報メディアっていうのを捉えて、そこで学校図書館がこんなふうに情報メディアに対して対応できてるっていうことをアピールできる一つのきっかけになるのじゃないかなっていうこと。それから他の4科目がわりあい、児童・生徒の指導っていうのに重きをおいていると私は思いますので、やっぱりここでは教員のサポートっていうことをもう少しやっていいのじゃないかなって。今の現状でね、今の現状で先生方がやっぱり困っていらっしゃるのじゃないかなっていう。それから4科目の中では、わりあい講義が中心なので、私はここでは本当に実践を取り入れて、ICT っていうやっぱり説明しても自分でキーボード叩いて

本当に自分で作ってみたいとわからないと思いますので、もう一つは特別支援の児童・生徒への配慮っていうのが必要なのかなって思います。はい、ありがとうございました。

## 森田英嗣「「情報メディアの活用」についての講義紹介」

私はスライドがなく、配布していただいた印刷資料のみです。まず、その確認ですが、A4の裏表印刷で「情報メディアの活用」についての講義紹介というのが1枚、あと二つはA3ですけれども、一つが講習の案内になっているようなもの、学校図書館司書教諭講習についての通知、裏になんか数字が書いてあるもの一つと、あともう一つはExcelの表で講習の内容についてというA3の紙がありますので、これをご確認ください。すみません、ちょっと趣旨を理解していないのかも知れないのですが、背景情報っていうことで、まずお話をさせていただきます。

### 「情報メディアの活用」についての講義紹介

森田英嗣（大阪教育大学）

#### 1. 目的

- (ア) 制度的には「学校図書館における多様な情報メディアの特性と活用方法の理解を図る」こととされる。  
 (イ) 「情報メディアの特性と活用方法の理解」には、実地的な図書館活用の体験が必要である。  
 (ウ) ただし、単なる使い方の教育に留まらず、メディアの本質を理解し、その活用者を育てるために必要な資質を育てることが必要になる。

#### 2. 講義の流れ

- (ア) そこで本講義では、①情報リテラシーと共にメディアリテラシーの必要と各々の内容を講義し、②情報問題解決課題としての二学期の授業づくり、③授業アイデアの交流の実施、という展開を行っている。

##### ① 情報リテラシーとメディアリテラシーの内容と必要

- ワーク「私のメディア史」によるメディアの意識化、アイスブレイク、班づくり
- 「書字文化」…戦争、焚書、ロゼッタストーン、物理的アクセス、知的アクセス、学校と図書館の役割、民主主義、図書館の自由、情報リテラシーの必要、「学校図書館宣言」
- 「映像文化」と「音響文化」への学校教育の拡張の必要、メディアリテラシー教育の必要（「グリーンバルト宣言」）
- 図書館の機能（ビデオをもとにした解説）
  - 図書館で資料を得て問題解決する方法
  - 文献検索の方法
  - 資料・データベースの特性
  - 情報整理の方法
- さまざまなリテラシー基準・原則にみるカリキュラム化へのヒント
  - アメリカ・スクール・ライブラリアン協会他（1998）による「情報リテラシー」→物理的アクセス、知的アクセス
  - 日本図書館協会学校図書館利用委員会（2001）による「図書館利用教育ガイドライン」→私の尊敬する学校司書
  - 全国SLA（2004）による「情報・メディアを活用する学び方の指導体系表」（2004）→所属校の指導体系表
  - Eisenberg, M. B. 他（1990）によるBIG6モデルと学習（勉強と研究）
  - Kuhlthau, C. C. (1993)による情報探索過程モデルと探究的学習

1

- 鈴木（1997）による「メディア分析モデル」と体験
- ユネスコによる「MILコンピテンシー」モデル（Wilson, C. 他, 2014）と教員に求められる資質・能力
- クロスカリキュラムによる情報リテラシー、メディアリテラシー教育の組み込みの方法
- 学習指導要領で期待される言語活動と図書館教育の組み込みの可能性についての資料（全国SLA）
- 情報問題解決としての指導体系表と二学期の授業づくり
  - 校種、専門教科が混ざるような3～4人班にわかれる。
  - 「課題（i）各班で小学校～高等学校までの学校図書館活用教育のカリキュラム（指導体系表）を作成しましょう。（ii）また、大学図書館を活用し、(i)に基づいて、各自が2学期に実践可能な図書館活用の授業案（数時間分）を作成しましょう。」
  - 大学図書館ツアーの実施
  - パソコン室の開放とネット情報の活用
  - 情報検索法の実用、グラフィックオーガナイザー等を用いた情報の整理や生成
  - 引用作法の応用
- 授業アイデアの交流
  - いくつかの班による発表と質疑応答
  - 学んだことの交流

#### 3. 論点

- (ア) メディアリテラシー教育の組み込みの必要性について  
 (イ) 市民性の育成の文脈での図書館利用者教育の在り方

#### ○自己評価

内容	達成度
高度情報社会と人間（情報メディアの発達と変化を含む）	○
情報メディアの特性と選択	△
視聴覚メディアの活用	△
コンピュータの活用	△
・教育用ソフトウェアの活用	×
・データベースと情報検索	△
・インターネットによる情報検索と発信	△
学校図書館メディアと著作権	△

「司書教諭の講習科目のわらいと内容」（文部科学省）[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/dokusho/link/1327211.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/dokusho/link/1327211.htm)

2

大阪教育大学学校図書館司書教諭講習の内容等について(H20～28)

開講年度	講習名称	実施方法	講義等の内容	単位認定方法
20	学習指導と学校図書館	講義・演習	そもそも「学び」とは何か。「学習」と「指導」の相関関係を分析し、学校図書館の活用方法を実践と理論の上で講義する。	出席及びレポート又は試験
20	読書と豊かな人間性	講義・演習	今日の子どものメディア環境において読書をどのように位置づけるべきか、その目的、対象、方法を、具体的に検討する。特に、実際に読書対象となる資料の多様な表現形態に接し、自らの選択基準を問い直し、児童生徒の発達段階に応じた体系化を探る。適宜演習を交えながら講述する。	出席及びレポート又は試験
21	学校図書館メディアの構成	講義・演習	学校図書館は、児童・生徒の学習を促進し、教員の教育活動を支援する上で独自の役割を担っている。そのために必要なメディアの種類や特性について解説した上で、メディアを容易に利用可能にするための組織化について演習を交えつつ講述する	出席及びレポート又は試験
21	学校経営と学校図書館	講義	学校教育における図書館の意義と機能・課題・経営の在り方、相互協力体制並びに司書教諭の機能と役割等について概説する。	出席及びレポート又は試験
22	学習指導と学校図書館	講義	「学習」と「指導」の相互関係を分析し、学校図書館の活用方法を実践と理論で講義する。	出席及びレポート又は試験
22	情報メディアの活用	講義・演習	学校図書館における多様な情報メディアの特性とそれらを活用した教育活動の具体例を検討し、学校教育の情報化を推進する司書教諭の役割について講ずる	出席及びレポート又は試験
23	読書と豊かな人間性	講義・演習	今日の子どものメディア環境において読書をどのように位置づけるべきか、その目的、対象、方法を具体的に検討する。特に、実際に読書対象となる資料の多様な表現形態に接し、自らの選択基準を問い直し、児童生徒の発達段階に応じた体系化を探る。適宜演習を交えながら講述する。	出席及びレポート又は試験 原則として、全日程の出席とする。 但し、止むを得ない理由が生じた場合は総時間数の4/5以上の出席とする。
23	学校経営と学校図書館	講義	学校教育における図書館の意義と機能・課題・経営の在り方、学校内における司書教諭の役割・位置付け、学校内での協力体制の構築や研修の在り方等について概説する。	出席及びレポート又は試験 原則として、全日程の出席とする。 但し、止むを得ない理由が生じた場合は総時間数の4/5以上の出席とする。
24	学習指導と学校図書館	講義及びワークショップ	これからの情報化社会を生きる児童生徒は、情報を主体的に選択し、活用し、積極的に発信していく力が育成されなければならない。学習指導要領においても思考力・判断力・表現力の育成が目指されている。学校図書館は授業にどのように活用されるのか。教科書や実践事例等を素材に、児童生徒の図書館利用教育や情報活用能力の育成について知る。最後に、学校図書館を校内で位置付け、活用するための司書教諭の役割と課題を考える。	出席及びレポート又は試験 原則として、全日程の出席とする。 但し、止むを得ない理由が生じた場合は総時間数の4/5以上の出席とする。
24	学校図書館メディアの構成	講義(若干の演習課題を含む)	本講義では、学校図書館メディアの構成に関する理解および実務能力の育成を目指し、司書教諭としての基本的な考えの構築についての理解を図ることを目的とする。 特に、情報社会における学校図書館メディアとその種類および特性、学校図書館メディアの組織化の意義と展開について述べる。 また、学校図書館メディアの分類法と目録法および情報ファイル資料の構成について実務内容の理解と技術の習得を行う。	出席及びレポート又は試験 原則として、全日程の出席とする。 但し、止むを得ない理由が生じた場合は総時間数の4/5以上の出席とする。
25	情報メディアの活用	講義・演習	まず最初に学校と図書館が社会の民主的展開のための、車の両輪とも言うべき重要な仕組みであることを踏まえたいと思います。その上で物理的アクセスの保障、知的アクセスの保障の両面から学校図書館教育の意義、なかでも「情報メディアの活用」の意義を具体的に考察し、その使命を明確にしていきたいと思います。 次に、「情報リテラシー」、「メディアリテラシー」の概念を明らかにし、それを教えるためのカリキュラムの在り方を、上記の学習と絡めて考察します。 最後に、受講者の所属する学校の関連カリキュラムを、本講義で学んだ内容を組み込んであたらしいカリキュラムとして再構成するという課題をパフォーマンス課題として提示し、評価の対象にしたいと考えています。	出席及びレポート又は試験 原則として、全日程の出席とする。 但し、止むを得ない理由が生じた場合は総時間数の4/5以上の出席とする。
25	学校経営と学校図書館	講義	学校教育における図書館の意義と機能・課題・経営の在り方、学校内における司書教諭の役割・位置付け、学校内での協力体制の構築や研修の在り方等について概説する。	出席及びレポート又は試験 原則として、全日程の出席とする。 但し、止むを得ない理由が生じた場合は総時間数の4/5以上の出席とする。
26	読書と豊かな人間性	講義・演習	今日の子どものメディア環境において読書をどのように位置づけるべきか、その目的、対象、方法を具体的に検討する。特に、実際に読書対象となる資料の多様な表現形態に接し、自らの選択基準を問い直し、児童生徒の発達段階に応じた体系化を探る。適宜演習を交えながら講述する。	出席及びレポート又は試験 原則として、全日程の出席とする。 但し、止むを得ない理由が生じた場合は総時間数の4/5以上の出席とする。
26	学習指導と学校図書館	講義	学校図書館メディアを活用した学習指導について、様々な実践事例を素材に学習し、理解を図る。また、児童・生徒がレファレンス・サービスなどの多様な図書館機能を活用すると共に、様々なメディアが発する情報を読み解き、活用する力(メディア・リテラシー)を獲得する意義と方法についても学び、考察する。 さらに、講習を通して、学校図書館機能を活用した授業を展開し、校内に発信する司書教諭の役割を共有し、深めることを目指す。	出席及びレポート又は試験 原則として、全日程の出席とする。 但し、止むを得ない理由が生じた場合は総時間数の4/5以上の出席とする。
27	情報メディアの活用	講義・演習	まず最初に学校と図書館が社会の民主的展開のための、車の両輪とも言うべき重要な仕組みであることを踏まえる。その上で物理的アクセスの保障、知的アクセスの保障の両面から学校図書館教育の意義、なかでも「情報メディアの活用」の意義を具体的に考察し、その使命を明確にしたい。 次に、「情報リテラシー」、「メディアリテラシー」の概念を明らかにし、それを教えるためのカリキュラムの在り方を、上記の学習と絡めて考察する。 最後に、受講者の所属する学校の関連カリキュラムを、本講義で学んだ内容を組み込み、あたらしいカリキュラムとして再構成するという課題をパフォーマンス課題として提示し、評価の対象とする。	出席及びレポート又は試験 原則として、全日程の出席とする。 但し、止むを得ない理由が生じた場合は総時間数の4/5以上の出席とする。
27	学校図書館メディアの構成	講義(若干の演習課題を含む)	本講義では、学校図書館メディアの構成に関する理解および実務能力の育成を目指し、司書教諭としての基本的な考えの構築についての理解を図ることを目的とする。 特に、情報社会における学校図書館メディアとその種類および特性、学校図書館メディアの組織化の意義と展開について述べる。 また、学校図書館メディアの分類法と目録法および情報ファイル資料の構成について実務内容の理解と技術の習得を行う。	出席及びレポート又は試験 原則として、全日程の出席とする。 但し、止むを得ない理由が生じた場合は総時間数の4/5以上の出席とする。
28	読書と豊かな人間性	講義	多様なメディアで物語や情報を得られる時代にあって「読書とは何か」「子どもにとって読書とはどのような意味があるか」について考える。また、児童・生徒向けの資料の特徴とその選書の観点を検討し、児童・生徒の発達段階に応じた多様な読書活動を具体的に学ぶ。加えて学校図書館の活性化のために、家庭、地域、公共図書館とのいかに連携すべきかについて講述する。	出席及びレポート又は試験 原則として、全日程の出席とする。 但し、止むを得ない理由が生じた場合は総時間数の4/5以上の出席とする。
28	学校経営と学校図書館	講義	学校教育における図書館の意義と機能・課題・経営の在り方、学校内における司書教諭の役割・位置付け、学校内での協力体制の構築や研修の在り方等について概説する。	出席及びレポート又は試験 原則として、全日程の出席とする。 但し、止むを得ない理由が生じた場合は総時間数の4/5以上の出席とする。



平成27年 7月 6日

司書教諭講習申込者 各位

大阪教育大学

平成27年度学校図書館司書教諭講習について（通知）

このことについて、別紙「受講許可通知書」のとおり受講が許可されましたので通知します。  
なお、講習初日の集合時間・講習会場、講習内容、持参物等は下記のとおりです。

記

1) 講習初日の集合時間・講習会場について

科目名	集合日時	講義室
情報メディアの活用	8月 4日（火） 午前9時45分	A-209
学校図書館メディアの構成	8月18日（火） 午前9時45分	A-215

講習会場 大阪教育大学柏原キャンパス（「柏原キャンパス案内図」参照）  
＊講義室へは、午前9時15分より入室できます。

2) テキスト等について

①「情報メディアの活用」について

①-1 テキストについて

資料は印刷教材を配布します。

①-2 事前学習について

所属校における情報リテラシー教育、メディアリテラシー教育にかかわる教育課程を可能な範囲で調べてください。本講義では、それを踏まえて、所属校の実態にあった、情報メディアの活用に関するカリキュラムを作成していきたいと考えています。

②「学校図書館メディアの構成」について

②-1 テキストについて

＊ 情報資源組織化部分のテキストとして  
『図書館資料の目録と分類』 増訂第5版 日本図書館研究会、2015年4月刊  
定価 1,188 円（税込）

【テキスト販売について】

講習初日に講義室前においても販売いたします。販売時間は午前9時～10時までです。  
購入は現金にておつくりのないようお願いいたします。

＊ それ以外の部分については、レジュメを配布。

②-2 事前準備は特にありません。

3) 持参物

・印刷（毎日出席簿に押印していただきます。）  
・受講許可通知書  
・82円切手（単位修得証明書送付用。全員。）  
・450円切手（修了証書送付用。受講許可通知書の修了欄に赤○の付いている方のみ）  
※切手については学内生協でも販売しております。封筒は本学で用意しています。

4) 講習内容

講習名	内 容
情報メディアの活用	最初に学校と図書館が社会の民主的展開のための、車の両輪とも言 うべき重要な仕組みであることを踏まえる。その上で物理的アクセ スの保障、知的アクセスの保障の両面から学校図書館教育の意義、なか でも「情報メディアの活用」の意義を具体的に考察し、その使命を明 確にしたい。 次に、「情報リテラシー」、「メディアリテラシー」の概念を明らかに し、それを教えるためのカリキュラムの在り方を、上記の学習と結 んで考察する。 最後に、受講者の所属する学校の関連カリキュラムを、本講義で学 んだ内容を組み込み、あたらしいカリキュラムとして再構成するとい う課題をパフォーマンス課題として提示し、評価の対象とする。
学校図書館メディアの構成	学校図書館の意義と役割、機能等に触れたうえで、学校図書館にお いて各種の情報資源を選択し、収集し、更新する際の考え方を講ずる。 それら選択・収集・更新によって学校図書館メディアは構成される。 さらに、蔵書（コレクション）として所蔵されている資料を有効に 活用するために、情報資源を組織化する方法について講ずる。一般に 図書館で標準的に使われている書誌的ツールの基本的な活用法を把握 することで、学校図書館における情報資源の探索を実現できるように する。

5) 講習時間

講習は、原則として次のとおり1時間90分・1日4時間（最終日は3時間まで）で実施します。

1時間 10：10～11：40  
2時間 12：40～14：10  
3時間 14：25～15：55  
4時間 16：10～17：40

（講習の内容により、時間が前後する場合がありますので、ご承知をお願いします。）

6) その他

・自家用車での入構については、ご遠慮ください。止むを得ない理由で、自家用車で入構される  
場合には、受講許可通知書が車両入構許可証の代わりとなりますので、提示を求められた際に  
は、すみやかに提示し、必ず駐車場に駐車してください。

・学内生協等営業時間（学生会館にあります）

第二食堂	11：00～19：30	弁当の持ち込み可
Restaurant FORET	11：15～14：30	14：30オーダーストップ 弁当の持ち込みは不可
サンカフェ	8：00～15：00	弁当の持ち込みは不可
Shop IRIS（売店）	9：00～17：00	切手販売は、10：00～16：45

H27学校図書館司書教諭講習受講者状況				
	「情報メディアの活用」	「学校図書館メディアの構成」		
個人申請者	28	35		
府教受受講者	56	68		
豊能地区受講者	2	2		
計	86	105	計	
内、受講後修了予定者	6	17		23

	「情報メディアの活用」 のみ受講	「学校図書館メディアの構成」 のみ受講	両方受講	計
個人申請者	7	14	21	42
府教受受講者	9	21	47	77
豊能地区受講者	0	0	2	2
計	16	35	70	121

	単位修得予定者	修了予定者	計
個人申請者	33	9	42
府教受受講者	63	14	77
豊能地区受講者	2	0	2
計	98	23	121

	免許状取得者	免許状取得予定者	計
個人申請者	38	4	42
府教受受講者	77	0	77
豊能地区受講者	2	0	2
計	117	4	121

教員養成の通常のカリキュラムの中にも司書教諭への資格の講義はあるわけですが、それは、私は担当しておりません。私が担当しているのは夏休みの学校の現職の先生向けの集中講義がありまして、それを担当しているということでございます。この案内にありますように、前回は[平成]27年に実施しております。[平成]27年の「情報メディアの活用」というのを見ていただくと、受講生が86名であったことがわかります。内訳は、個人申請者が28名、それから[大阪]府教委を通じての申込者が56名、また、北の豊中市・池田市・箕面市・豊能町・能勢町からなる豊能地区というのがあるので、その地区を通しての方が2名ということであります。個人申請者の中にはですね、教員の資格を取りたいのだけれども、大学の授業の中で取り忘れていたので、集中で取れそうなので来ましたという現役の学生が何人かいました。あとは現職の教員

員じゃないのだけれども、教員の資格をもっていて司書教諭の資格を取りたいという方、その他は教員の方方で、小・中・高と特別支援学校の先生方が来られています。86名という



ことで、ほとんど名前も覚えられない4日間ではありますけれども、どのような講義をしているかということはこのA4の裏表の紙に少し紹介しています。

私の専門は教育工学なのですが、ちょっとその教育工学に違和感をもって生きているという経緯がございます。機械機械したことをやっている人があんまり好きになれないっていう、ちょっとあのひねくれた感じなのですね（笑）。と申しますのも、本日のキーワードである「情報リテラシー」には、図書館教育の方がおっしゃる意味と、情報教育の方々がおっしゃる意味の間に、微妙な違和感、要するに座りの悪さみたいなものがありまして困っております。私からすると、図書館教育の方々が正統的な「情報リテラシー」を流通させようとしていると思うのですが、コンピューター教育から派生した情報教育を唱えている方々はどうも、あ、そういうこと言っちゃいけませんけど、ちょっとズレてるのかなっていう感じがしております。私はもともとそのズレてるほうに属していたものだから、違和感がぬぐい去れないっていう感じがあって、もうちょっと情報の読み書きっていうようなもののところに重心を置くっていうことが必要なのだろうっていうのを今の教育工学の中でも思っております。最初は、その違和感の原因が何なのかはわからなかったのですが、図書館教育と出会ってからこっちが居場所としていいなっていう感じで少し勉強するようになったところでもあります。

そうですね、内容に関してはということなので、専門的な訓練を受けた者じゃございませんので、それこそ文科省のこういう中身をやってくださいっていうような設定の文章を読み、勝手な解釈の下でやっているというようなところでございまして、まったくの手作りで、テキストも使ってございません。それから毎年1回やっているわけではなく、数年に1回という事なので、終わるとほっとして、次の年まで油断していて、講義の直前になって慌てて準備するのですがいつも時間切れという感じでだいたい同じようなことをやっているかなって思います。それから司書教諭講習の他の科目についての内容とどう切り分けるかっていう話がありましたが、それもなかなか上手くできなくて、たぶんこれも勝手なイメージでやっていて、大変申しわけないなというふうに思っております。ただ、ポリシーがないわけではありません。その一つは「メディアリテラシー」でして、やはり司書教諭の方はこういった分野について学んでおく必要があるだろうというふうに考えております。つまり「メディアリテラシー」は情報を媒介するメディアを、市民の視点からどう読んでいくか、使っていくかっていう話でもあるので、そこを少し強調しているなあとと思います。

目的のところで整理させていただくと、制度的には学校図書館における多様な情報メディアの活用とあと特性と活用方法の理解を図ることとされております。情報メディアの特性と活用方法の理解ということには実際の図書館活用の体験が必要だろうということで、実際にはですね、大学図書館に協力してもらってですね、大学の図書館で調べるというワークを取り入れています。調べてどうするのかというと、2学期の授業を作ろうということなんです。ただし単なる使い方の教育に留まらず、メディアの本質を理解し、その活用者を育てるために必要な資質を育てることが必要になってくる。この資質としてイメージしているのが、いわゆる「情報リテラシー」と「メディアリテラシー」というものでございます。講義の流れはそこに書いてあるようなもので、最初に、①「情報リテラシー」と共に「メディアリテラシー」の必要とその各々の内容を講義するとあります。ワークショップも入れております。そのあとに②情報問題解決課題というようなことで、2学期の授業作りっていうのをやってみようという流れです。そして③に「授業アイディアの交流の実施」ということで、実際に作った体系表や指導案を交流してみようって言うても、80何人もいますから、全部はできないのですが、班の中でやったのといくつか、代表して発表していただけるって

いう方に全体で発表してもらい、交流するということでございます。

詳しく申し上げますと、①については、まずは「私のメディア史」というのは、まず自分はどういうメディアとの関わりでもって生きてきたかっていうふうにして、幼稚園、幼少期、修学前から今までの時間を振り返ってもらって、どういうメディアとの付き合い方があったかを意識化していく。そこでついでに知り合いになりましょうってということで、アイスブレイクを含めています。これは私も、もう何回もやっていますが、とても面白い経験で、特に年代の違う人たちがいると、まったく知らない体験があることがわかります。例えば私は父親の影響で昔、「コンバット」というアメリカの戦争ドラマがあって、それはヨーロッパ戦線で戦っているある部隊の軍曹とその手下の話なのですが、それをずっと父親と一緒に見ていた時期があります。年代の違う方はあまり見たことがない番組だと思います。このようにその人にはその人の何か好きな番組があったり、あるいは絵本とか、好きな本、そしてそれに関係する人について語り合うわけですね。そうすると結構、我々の人生に大きく影響を与えていたり、世の中の見方や考え方、進路選択とかにも影響していそうなことを話し合いながら確認していきます。私の年代では、「金八先生」に影響されて教育学部に進学した人もおり、そういう人生との関わりを通して、メディアがどのような役割を我々の人生においてしているのかを振り返ってみます。

それから「書字文化」って書きましたけど、ユネスコの「グリェンバルト宣言」という宣言がありまして、これはメディアリテラシー教育にとっては大事な宣言なのですが、これに触れつつ学校教育が今、期待されていることは、そもそも何なのかを確認したりします。すなわち、学校は文字を教えるところであり、文字の読み書きができるという人を育てることを、一つの目的にしております。文字によってあらゆる人間の体験が記録されているわけですからその必要性や意義は自ずから明らかです。けれども、最近は文字だけではなくて、映像や音声、そういったものでも世の中や人間の体験が記録されているわけですから、そういったものの読み書き能力をどうやって育てていくかという新しい役割が学校に期待されるようになってきた。このことが今、学校に求められている事柄であるという確認をして、しかしカリキュラムを見てみるとそんなことはほとんど考えられていないですよっていう話になるわけですよ。しかし、図書館がそもそもどのような理由で必要なのだろうかという話の中で、「図書館の自由」の概念だとか、ユネスコの「学校図書館宣言」を確認し、情報やメディアが学校教育の中で、どういうふうに扱われるべきかを考えてもらいたいと思っております。

ですが、図書館の機能を確認しつつ、2学期の授業の案を作ってもらうことにしています。皆さん現職の先生が多いので目を輝かせて、どうせ研究授業をしなければいけないのだったらこの講習会を利用して作ってしまおうとか、興味のある教材を作ろうと思っていたので、この機会に作家の誰々について調べてみようとかっていうようなことをやられます。そういうようなことやるのだけど、図書館が使えなかったらダメでしょっていうようなことで、図書館の機能について整理してもらいたい意味もあり、大学の1年生向けの紀伊國屋書店が出している3本立ての非常に面白いビデオ「情報の達人」シリーズ第3巻「レポート・論文を書こう！」(2007)があるので、それを見てもらうことにしています。その中にいろいろ、検索だとかデータベースの特性だとか、情報をどうやって集約したり、集めたり、記録していったりって話があるので、こういうようなことを話して少し補足するということをしてしました。実はそういうカリキュラムが学校に求められているのだけれど、そういう図書館活用のカリキュラム、あるいはもう少し進めてみたカリキュラムにはどういうのがあるかっていうところに話を進めて、カリキュラムを紹介します。受講されるときはご自分が所

属する学校の図書館活用体系表みたいなのがあったらそれを持ってきてくださいっていう事前課題をだしているのですが、持ってこられる方もいれば、そんなはありませんっていう方もいらっちゃって、それがどういうものであり得るかを、(3)のSLAの「[情報・メディアを活用する]学び方の指導体系表」で示したり、あるいは「Big6」モデル(big6.com)だとか、あるいは探究学習の体系表だとかを示していきます。と同時に鈴木みどりさんのメディア分析モデル<sup>3)</sup>っていうのがあって、これ非常に面白いので、いくつかワークをやってみたりもし、どういうカリキュラムになり得るのかっていうことを、体験を通して考えていただき、それから最近だとユネスコが「メディア・インフォメーション・リテラシー」という概念を作って、先生たちがその資質能力をもつべきだっていうようなことを言っているので、それはどういうものなのかっていうのを紹介したりしています。しかし学校教育の中にそういうカリキュラムを組み込むって言っても、そういう専門の時間があるわけではないので、クロスカリキュラムで組んでいくしかないですよということになり、クロスカリキュラムの組み方を簡単に紹介し、それで学校の中で情報メディアリテラシーを育てていく方法っていうのはこんなことができますよねっていう話をさせてもらっています。

②では、指導要領で「言語活動」が特に強調されていますが、それが実際にどのように記述されているかっていう資料がSLAのホームページに載っているのですね<sup>4)</sup>。なかなかいい資料なのでこれを見てもらいながら、図書館教育にどうやってクロスして組み込んでいったらいいのかっていう話をします。そして、③ですが、そこで今度は2学期の授業作りを指導体系表と一緒に作ってしましようという課題を与えています。校種・専門教科がわざと混ざるようにして、3～4人の班を作って、次のような課題を与えています。「各班で小学校から高校までの図書館活用教育カリキュラム表を作ってみましょう。また大学図書館も活用し、各自が2学期に実際可能な図書館の授業を作成してみましょう」と。で、大学図書館側にツアーをしてもらって、パソコン室を開放してもらって自由に使えますという環境を準備しています。あと情報検索の応用だとかグラフィックオーガナイザーの使い方みたいなのを組み込んでいくといいのですよっていう話をし、引用っていうのもこういうふうにしますよっていうこととして、指導案を作ってもらうっていうようなことをやります。最後に、できあがった成果を交流するということでもあります。それでどうかな、何が実質的に学べたのかなかなか心もとないところがありますけれども、図書館の機能を知り、図書館で教えるべきメディアについての内容をいちおう確認し、2学期の授業を作れたという感じで終わっていきます。で、一番下、自己評価ってあります、先ほど今井先生も出していただきました、文科省の方の資料「司書教諭の講習科目のねらいと内容」というところと、自分の講義内容を当てはめてみてどうなるのかなとチェックしてみると、非常に甘い採点ですけども、×が一こという、まあそういうところかなと思いました。

論点としては、「メディアリテラシー教育」を組み込むエンジンとしての学校図書館というイメージはいかがかということです。「メディアリテラシー教育」は高校の普通教科、情報の中にもようやく少しずつ入り込んできたっていう程度ですよ。学校図書館でメディア活用のカリキュラムっていうのを展開していくのだとしたら、やはりこれが一つの柱になるのだろうと思っていて、それがどういうふうに通常のカリキュラムに組み込めるのかなっていうことに興味があるっていうか、問題意識をもっています。それからやはり重要なのは、外国の文献なんか読むと、どうしてもやっぱり民主主義だとか市民性の育成っていうのが強く出てきているのに対して、日本の学校図書館教育ではどうもなんか楽しんで読みましようっていう話になりがちのところも、意識化したいと思っております。それが「情報メディアの活用」でやるべきことなのかどうかっていうのはちょっとわからないところはあるので



すけど、そんなことを思いながら数年に一度、焦りながら授業をやっているということでございます。以上で、終わります。

(中村) では、いちおう発表していただいたお三方同士で少し前でお話しいただければと思います。お願いします。今井さんにいちおう、預けておきます。

(今井) じゃあ今からですね、お二人とも、20分で収めていただいてありがとうございます、14時45分くらいまでちょっとこの3人でということでお話をちょっと代わらせていただこうと思います。で、まずは3人の発表を聞いたところでまた何か追加したいところがありましたら各自からと出すということで、ちょっと1回ずつマイクを回してみたいと思います。

私の方からすみません、順を切ってやりますが、中島先生の発表をうかがっていてちょっとイメージできてきたところがあって、二つありまして、一つ目が話をちょっとうかがって、ある司書課程の科目とちょっとすごく重なって聞こえてきたのですね。「図書館情報技術論」という授業があるのですよ。あの授業も確かにホームページ作るし、データベースはやるし、あらゆることに「情報メディアの活用」とすごく似てる、目的が違うのだけどすごく似てるなと思って、実は私、情報技術論ではホームページ作らせているのですよ、意味ないと言いながらも作らせている。それはやっぱり理由があって、図書館員だったらホームページ作るのは当たり前だよっていうところがあって、司書教諭だとそこは違うのじゃないかっていうみたいなのところがあって、そういう話を思い浮かべながら、だから「図書館情報技術論」とどう区別するかなと、司書課程との棲み分けみたいなもの、だから司書と司書教諭を取っている人からすると、また同じ話っていうのは確かに出てくるのかなっていうのを聞いていて思いました。それが一つと、あとこれは恐らく北先生のところの発言であったかと思うのですが、how to っていう話があって、確かにそうだなっていうのは僕も思っています。ただこの「情報メディアの活用」の中で一番厄介なのは how to を教えるのですが、学校現場において目的がなく検索するっていうことがまずないので、例えば理科の授業で検索する時と国語の授業で検索する時が当然、後ろについてくる教科の知識というか、文脈が絶対あるはずなのでそういうものと切り離して話ができないよなということを改めて感じました。だから私が「情報メディアの活用」でノウハウの話を嫌がるのは、結局、これ学校の先生だから教科の専門性みたいなのが出てくるだろうっていうのがあったので、そこでちょっと頭にあったのでそこをちょっと再確認したかなと思います。

で、森田先生の話をおうかがって、森田先生の発表のほうに移るのですが、86名とは羨ましいです。私の授業は人数が少ないのです、本当に。司書課程で大学の学部でやっている司書課程の講習だと最近10人超えないのですよね。20人いったのが、だから5年ぐらい前がピークで、そこからどんどんどんどん減ってきていて、先日某大学でやった時は3人っていうのがあって、ちょっとこれどうなのかなっていう気がして。ちょっと森田先生のお話をうかがいながら、もしかするとこの司書教諭講習自体が現職者への講習みたいなのが中心になってくるのではないかなっていうことをちょっとうかがいながら考えたということです。あともう一つがメディアリテラシーの話でして、鈴木みどり先生の話が出てきて、すごく僕、懐かしかったのです。僕、学部の時に実は、自分がいた学部で鈴木みどり先生の授業を受けておまして、集中講義で受けていました。それなので私、実は「情報メディアの活用」といえばその鈴木みどり先生の時に聞いた話を使いながら黒澤明の「羅生門」という映画の話をして、「藪の中」と「羅生門」の芥川[龍之介]の作品を合わせて、三者三様に殺人の現場をどう描かれるかっていうメディアリテラシーの教材として一番使われるや

つなのですけど、あれを使いながら情報リテラシーとメディアリテラシーの何が違うかっていう話をつい昨日してきたばかりです。その話を見ながら、確かにメディアリテラシーの話って図書館の人はあまりやらないなと、情報リテラシーがあるせいであまりやらないなっていうことを再確認しまして。でもメディアリテラシー、たしか鈴木みどり先生が言っていたと思うのですけど、クリティカル、批判的な思考という日本語にすると悪い意味がつくのでずっとクリティカルって言っていたのを覚えているのですけど、クリティカルにメディアを見るっていう価値があって、図書館じゃ逆にないなと。図書館員がメディアを判断するってあまりしないので、むしろ立場の違う物を出して並べて、はい、比べてくださいって利用者に委ねちゃうところが[日本の]図書館だと思うので。でも司書教諭がそれでいいのかなっていうのは、メディアリテラシーの話をうかがいながらちょっと考えたので、その点もちょっと皆さんのこれからのディスカッション用に使えればと思います。ということですみません、私の方からは以上でございます。お願いします。

(中島) はい。自分の立場で感じたことはまた後で説明することにして、今井先生の授業を拝見しました。レベルは8割の学生さんが身につけるようになっておっしゃっていますが、私の印象では相当新しいことを取り組んでらっしゃるので、教員の方が大変かなって。私、その戦艦ゲームっていうのも知りませんので、Twitterを使った大学間の授業実践とか、そういった新しいSNS使ったそういったものも実際、自分たちでやってみたいなどはすごく思っているのですけども、何しろ自分の技術がそこまでまだまだいいということ。あの、印刷メディアとWebメディアの対比っていうのは確かに私も「情報メディア[の活用]」の時に言うべきかなと思っているのですけど、主な線引きは「学校図書館メディア[の構成]」で相当やっているつもりでしたので、そのあたりと。それから学習指導案の作成も先生もおっしゃいましたけど、私が「学習指導と学校図書館」を担当していた時は学習指導案も作成していましたので、やっぱりいろんな科目とのつながりがあるいいのですけども、やっぱり学生にすると本当になんか聞いた話とかやった話っていうふうな、かなりその司書教諭の科目に関しては特に印象が強いついていうふうに言っていましたので、私の場合は思い切って「情報メディア[の活用]」の方は考えないようにいたしております。

それから森田先生のは、やっぱりこれは夏期講習ということで学生相手というよりは現職の先生相手という、ちょっとベースが違うかなっていうことで、私も夏期講習担当しているのですけど、本当に私も学生と同じ授業をしていますけども、かなり内容はやっぱり変えていますので、学生相手と夏期講習では。それからメディアリテラシーの教育ということで私自身がちょっとメディアリテラシーと情報リテラシーというのがあまり上手く区別がついてなくて、どちらかと言うと情報リテラシーっていうのをかなりいろんな授業で強調していますので、あえてメディアリテラシーっていうその教育を組み込むっていうことが私にとってはちょっと論点にあげてらっしゃいますけど、本当にここも少し先生にご説明いただけたらなと思います。それから利用教育のあり方に関してももうこれは全5教科に通じて特に「学習指導とか学校図書館」とか読書指導(「読書と豊かな人間性」)のところなんかで利用教育、それから「学校経営[と学校図書館]」のところでは民主主義のこともやっていますし、私がちょっと梅花で4科目も担当しているっていう特殊な面もあるかもしれないですけども、はい、以上です。

(森田) はい、ありがとうございます。私はこの科目しか担当していないというか、その他の科目は見えないっていうような中で非常に不安をもちながら、これでいいのだろうかということでやってきたので、今日のような会は、大変、勉強になるということでありがたく思っ

ております。お二人の先生のお話、やっぱり非常に体系的で、隙がないっていう感じがして、やっぱり僕はちょっと趣味に走りすぎてたかなといろいろちょっと反省しております。自分が楽しかったらいいやっていうのがちょっとあって、でも来てくれてる人も楽しんでもくれたらいいなっていう中で、だからこそもうちょっと勉強し直して責任をもってやらなきゃいけないなっていうことを今日は痛感しました。特に何を内容として含めなきゃならないのか、そのところをちょっと突き詰めていきたいなというふうに思いました。ただ今井先生も内容については迷っているというふうにおっしゃっていたし、他の科目との関連はまだ十分に整備する余地があるとか、まだまだ整理する余地があるっていうお話を聞くと少し自分の色も出していいのかなみたいなことも思うし、そのあたり、どこのあたりで線を引いたらいいのかっていうことは、今日はちょっとはっきりさせたいなと思っています。だいたいそんなところで、私の反応ということでお許してください。

(今井) あ、はい、ありがとうございます。まだ多少時間がありますので、10分くらいあるのですが、この時点でフロアからお受けするのは。

(中村) いいですよ。

(今井) フロアの方から今の講義のことについて質問とかありますでしょうか。おそらくお手元のペーパー（アンケート）、どういうふうにかこうかって悩んでいる方も多いのじゃないでしょうか。はい、それが頼りでございますので、この時間。じゃあ特になければ、ちょっと早めて、前倒しにして、ちょっと皆さんとのフロアとのディスカッションの時間を長く取るということでもよろしいでしょうか。

(中村) 今の、中島先生が森田先生に投げられたメディアリテラシーと情報リテラシーの話はどうですかね？

(森田) この整理というのは微妙なところがあって、いわゆるそのアメリカの「情報リテラシー基準」がありますよね<sup>5)</sup>。あの中で「物理的なアクセス」と「知的アクセス」という概念が使われていますが、メディアリテラシーはこの「知的アクセス」のほうにずいぶんと関係しているものだというふうに思います。実は社会的文脈で読みましようっていうのが、鈴木[みどり]さんの定義のとても大事なところで、社会的な、おっしゃっていたクリティカルっていうことでございますが、要するに、受容する、目の前に出てきた情報に、ああそうなのかっていう受容をするのではなくて、自分が、もっている知識だとか体験だとかときっちり組み合わせて読んでいましようということと、だから「読み取る」のではなくて、「読み解き」ましようってわざわざ言いますよね。「読み解く」という活動は、パズルを解いていくような活動がイメージできます。どうして作った人はこういう作り方をしたのだろうというようなことですよね。言い換えれば、レトリックを学ぶということですね、なぜこのレトリックが使われているのかとか、例えば映像なんかだと知らないうちに背後で音楽が流れたりしていて解釈が導かれてしまいそうな時もあるわけです。そういった非常に複雑な成り立ちをしているメディアを対象にして、メディアとかメディア作品を対象にする、分析的な思考を働かせるということにしています。それからあるメディア作品に対していろんな解釈が出てくるのですが、それは人によって違うのが普通なわけですね。なぜ僕とあなたで違う解釈だったのだろう、それは二人の中の体験だとか知的背景だとか育ちだとか、年代の違いだとか、そういったものがどういうふうに影響しているのだろうって考える、私たち自身の研究っていう一つの領域があって、つまりテキストの研究と、テキストっていうのはメディア作品ですよね、と同時に私たちはどうしてそういう解釈を導きだしたのだろうっていうことの探究も含まれます。



それからもう一つ、作った人はどうしてこういうふうにしたのだろう。このことを言っているけど、このことを言っていないのはなぜなのだろう。この人は出ているけど、この人が出ていないのはなぜだろうとか、というようなことを考えていくわけですね。意図的に何か作ったっていう読み解きよりはむしろ文化的、あるいは思想的、経済的、政治的背景みたいなものを考えながらその作品の作り手を想像していく、読み方というような感じなのです。そうすると面白い教材もあって、最初、一見してこういうことを言っているのだから思うのですけども、何回か見ていると、だんだん違ったふうに思えてくるとかですね、そういうようなのもあって、つまりメディアを介したコミュニケーションっていうのは、例えば民主主義っていうのはまさに思想の自由があって。情報が自由に手に入れられるっていうことの中で成立しているのだけれども、それだけだとちょっと怖いよねっていうかヤバいところもあるよねっていうか、そこまで意識が向かないと本当は民主主義って成り立ちにくいんじゃないのかみたいなところまでちょっといきたいと思っているのですね。で、図書館はやはりその社会を支えるツールだというふうに思いますから、そこで今のような、態度というか、リテラシーみたいなものを育てるとするのは非常に合理的だし、意味あることかなと個人的には思っているという、まあそういうことですね、なかなか難しいのですけど。だから今、言った三つですね、テキストの分析と私たちの分析とそれから制作者の分析みたいなことをちょっとワークでやってみてですね、見えないものが見えてくるっていうことを体験することも重要になります。情報っていうのは単に受容するものじゃないのだっていう。作った人がいるのだっていう、作った人は生身の人間なのだっていうこと、その人は何かを伝えたいためにこういう表現をしたのだっていうあたりをあたりまで想像できるようになればいいと思います。疑い深いといえば疑い深いですね、ずっとそんなことをやっていると疲れ果ててしまうのですけど、自分のこだわりがある重要なものだから、「あれ？」って思ったようなことについては今の態度や技能を働かせることができるっていうのが大切なことなのだろうなっていうふうに思って、そんなようなことをずっとやっているということです。説明になっているかどうかちょっとわかりませんが。

(今井) 私の場合はかなりこの鈴木みどりさんの授業を受けた後に実はメディアリテラシーという言葉が出てくる文献を分類するっていう研究を昔、したことがあります。その時にたぶん僕が使ったのが東大の山内祐平先生が使っていたコンピュータリテラシー、インフォメーションリテラシー、メディアリテラシーっていう三つのベン図の枠があって、真ん中が重なっているっていうやつがあるのですけれども。たぶん[日本の]図書館のインフォメーションリテラシーって情報を集めてくるスキルや評価、使うスキルっていうところまではいくのですけど、じゃあそれを解釈するっていうところが実は結構、踏み込まない、踏み込まないところがあるのですが、メディアリテラシーってわりとちゃんとその先まで読み込むっていうか。

例えばインフォメーションリテラシーだったら例えば、すみません、鈴木みどりさんの授業の時のことを思い出してしゃべりますが、教材があって、参議院選挙の小泉政権だったかな、郵政選挙の参議院選挙の時の、あの時はいわゆる産経新聞系とそれから毎日放送系のニュースを二つ流すと、二つ両方見ると、そうすると、見ると、取りあげ、演説の取りあげ方が全然違うと、同じ演説を映しているのだけれど、後ろにつけているナレーション一つで小泉純一郎さんに対する印象がまったく変わるよねとか、どう？っていう話をするのですね。で、たぶん[日本の]図書館の人だったら並べておいて両方見られますよのところまで止まると思うのですけど、メディアリテラシーの僕の印象はさらにもっと踏み込むっていう印象があるので、僕はだからそのこの区別みたいなものはやっぱり図書館の世界には結構、必要なと

思っているので、森田先生はすごく恐縮されて、いや、外れているって話ですけど、むしろこれからちゃんとやるべきかなと。*Information Power* (American Library Association and Association for Educational Communications and Technology, ALA, 1998) の中に出てくる基準の中の確か七つ目ですかね、情報が民主主義社会にとって重要であることを認識するっていう話が出てきますけど、たぶんそういうメディアリテラシーの文脈を押さえておかないと、あのインフォメーション・パワーも理解できないのじゃないかっていうことをちょっと今、話を聞いて思い浮かべました。すみません、余計な話です。ちょうどいい時間になりましたので、はい、じゃあどなたか、大丈夫でしょうか。じゃあ、15分でもよろしいでしょうか。じゃあ15分でまたコメントシート書いていただいて、私、この部屋におりますので、その後また15時前くらいから、今43分ぐらいですから、15時2分前、14時58分からちょっと後半を開始しましょうか。だいたい15時くらいからだと思いますが、よろしくお願いします。

## 質疑応答

(今井) 三人宛に来た質問を一通り答えてから、その後に、三人に来た質問に応えるべく議論をしたい。まずは、私にいただいた質問です。「成績評価は60点が最終試験とのことですが、試験の概要をお教えてください。」これについてはこの文章を受講中の学生さんが見る可能性もあるのでオフレコにさせていただきます。(中略)

「学習指導案の作成は何をねらいにしていますか？メディアを活用した授業ができること？メディアの利点を知ること？」それから「メディアには電子黒板やPPTソフトなどを含みますか？」学習指導案のねらいについては、指導案を書く段階でさまざまなメディアを選択肢として想定できているかを見ています。司書教諭課程で参考にされる教材として、IPAが取材し、DVD化した教材の中に、同志社国際中学校・高等学校の実践が収録されています<sup>6)</sup>。その中で、「Wearable Media」(着れるメディア)という実践が紹介されています。私はそれをヒントに、指導案を書く際にそもそもさまざまなメディアを選択肢と想定できるかを指導案作成のねらいにしています。よって、指導案の出来不出来や一貫性については、重要視はしていません。次に、メディアには電子黒板やPPTソフトなどを含みますかという質問ですが、これは、今まではそのような選択をしてきたグループはありませんが、メディアは多様であるとしていて、例えば誰かへのインタビューでもメディアと定義してもよいと考えているので、含めてよいと思っています。[もちろん何かの内容を含んだメディアと、表現手段でしかない電子黒板は区別されるべきだと思いますが、少なくとも今回の授業実践では禁止をしていない以上、受け入れるべきだと思います。]

(中村) ちょっとついていけないのですが、ご発表中に説明していただいたかもしれませんが、指導案作成は、青学の例で言うと、11回から14回で行なっているのですか。

(今井) そうです。ただし、授業を1時間したうえで、30分でグループワークという感じです。宿題にしても、なかなか学生さんが集まる時間が取れないようなので授業中に時間をとっています。

もう一つ。「検索に文脈があるというのはわかるが、基本の技術(ハウツー)はあって、それは教えなければならないのでは？」これについては、初年次教育で学んでいる、という前提で授業をしています。そもそも、今、検索エンジンには、「OR、NOT」検索のできないものもあつたりしますし、高度な技術は少なくとも探してることができるようになってきているのではとも思いますし。

これにつながりまして、中島先生へのご質問ですが「中島先生のように特定のソフトウェ

アの利用にかなり時間をかけてしまうと、今度は学生がソフトに依存しない理解に至っているか不安になりませんか？」

(中島) ソフトは、普及しているもの、梅花女子大学の PC に入っているもの、ということで、マイクロソフトのものを使いました。

(中村) 教師の側が指定する商業的なソフトウェアを使わせることが、そのソフトウェアを推薦するかのように受け取られることになって嫌だから特定のソフトウェアの演習はしないという先生や、そもそもソフトウェアの評価・選択方法から教える必要がある、という考え方があったりすると思います。どうでしょうか。

(中島) 家が Mac なので、という学生がいたときには、もちろん、それで作ってもいいよと指導したことがあります。特定のソフトウェアを薦めているつもりはないのですが、Word、Excel などは、会社に入っても使うだろうと思いますので。

(フロア 1) 中島先生、ちなみに、図書館だよりを作らせる課題では、内容の枠組みは決まっているのですよね？

(中島) こちらから示しています。貸出と利用状況の統計、それから図書の紹介という枠組みはこうやりなさいとしています。最後の「トピック」については、自由に作ってよいとしています。Access の課題以外はすべて 1 時限で終わるようにしているので、私の授業は少し盛りだくさんかもしれません。授業中に終わらないとあとはすべて宿題にしているので、枠組みはある程度、こちらから示す必要があると考えています。

(フロア 1) 現場経験のない学生がどこまで発信する内容をイメージできるのかなと思ったのうかがいました。

(中島)：図書館に勤めている卒業生が作っている図書館だよりを紹介したり、過去の学生が作ったものを見せたりしていますし、最初は思い出せない学生も、だんだん、自分の経験を思い出してきているようです。

(今井) 森田先生へ、「グループワークは何故、校種、教科が混ざるようにしているのですか？」これらはいかがでしょう。

(森田) 全体を見渡して前後のカリキュラムとの関係で自分のところはどうかよねっていうような、これは理想論かもしれませんが、そういうような形で見れたらいいかなと思ったことがあるかなと思います。

(今井) つまりじゃああえてその違う人たちと触れ合ってもらうことに意味がある？

(森田) そういうような感じがしたので、そうやって見ていると。

(今井) なるほど。

(森田) じゃあ、違うやり方がよりいいのかと言うとそれはあまり探究してないということですが。

(今井) 大丈夫でしょうか？質問いただいた方、ご指摘はよろしいでしょうか？それから、森田先生の実践の中で大学図書館で調べさせるっていう話があるのですが、何で大学図書館なのですかっていう素朴な疑問だとは思いますが。例えばこれ公共じゃダメですかとか、学校、まあ学校というのは難しいでしょうけど、公共じゃダメなのですか、という質問が出ておりますがいかがでしょう？

(森田) はい、大学でやっているのです、すぐ横に図書館があるので、そこで調べてきましょうということで。あとは学校の先生だし、うちの大学図書館は貸出証を作ることができるので、もしよかったら作ってくださいということと、あとツアーをしてくれるので、その間、僕がお休みできるっていう(笑)。まあそういうような感じで。

(中島) どれくらいの時間なのですか？



(森田) ツアーですか？

(中島) はい。

(森田) ツアーは2、30分やってくれると思います。

(今井) でも今、お話しされていましたが、結構、あれですよね？この講習自体に時間の制約って大きいんですよね？

(森田) そうですね。

(今井) そうですよね。あの、ちょっとうかがいたいのですけど、例えば僕、全然、こういう講習を受けたことがない、やったことがないのでわからないんですけど、事前課題とか結構、出すの、難しそうなイメージがあるのですが、いかがですか、森田先生？

(森田) 事前課題はもし所属している学校でそのメディア利用のカリキュラムがあったら持ってきてくださいっていうことをしている。

(今井) その段階でもう出しちゃっている。

(森田) っていうのをやっています。それは事務の方から皆さんにお伝えしていただいてまして、当日、初日に持ってきてもらいます。それをもとに何かしましょうっていうことだったり、それから[全国]SLAのものと比べたらどうかみたいなことをちょっとやってみたりということで。あんまりでもチェックはしてないんですけど、持ってこられる方は持ってこられていますね。

(中島) 持ってない方も。

(森田) いらっしゃいます。それがない学校があったり、そもそも所属のない方もいらっしゃいますので。

(今井) でも時間的な制約から使っているのかなっていうちょっとイメージがあるのです。大学図書館すぐ傍にあるって言った時に、たぶん横着するために使っているわけじゃなくて、いや、時間的にだって公共、行っていたらそんな時間ないよみたいなところもあるのかなとちょっと考えました。ということで個別にいただいているのはこんな感じですけどよろしいですか？大丈夫でしょうか？

(フロア1) すみません、いいですか？

(今井) どうぞ。

(フロア1) ここは附属の小学校とかありますよね？

(森田) あります。

(フロア1) 学校図書館はあるのですが、そこでもあえて大学なのですか？

(森田) えっと、すみません。

(フロア1) そういうところは使うっていう前提ではなくて、大学、私もあの質問したのですが、なぜかというコンテンツ、内容、っていうかまあ置いてあるメディアが重なるものもあれば全然重ならないものもあるので、なんかそれを前提に演習なのかなって、そこがこのメディアの活用やる時にすごくネックだと私は思っていて、自分自身も集中とかでやる時にああすごくネックだなんて思っているのも、そこら辺を他でどう解消できるのか、解消できないのか、ちょっと、もしくはこの大阪教育大学は他にちゃんと附属があるので、そういうところではできないのか。

(森田) その講習会をですか？

(フロア1) 講習会というか、まあ何かっていうか、そのもし演習をどうしてもやるって、学校を使うっていうのであれば、っていうことはどうなのかなって思ったりしているんですけど。

(森田) 大阪教育大の附属は、あんまり学校図書館は活性化してないのです。使われること

もやはりそんなに多くないようですね。

(フロア 1) 逆に今のその日本の中の学校図書館を見た時に、そういうところもたくさんあるじゃないですか？だから現実としてそのみんなが司書教諭になるにしろならないにしろ行った時にそういうところでやらなきゃいけないっていうのがあって。

(森田) そうですね。

(フロア 1) だからそういうところでやる意義もあるのかなって思って。

(森田) あると思いますよ。確かにあると思います。

(フロア 1) なので、そういう意味では他の大学でやるよりはやりやすい環境にあるのじゃないかなって思って。

(森田) なるほど、附属のね。

(フロア 1) おうかがいしました。

(森田) ありがとうございます。

(フロア 1) すみません。

(森田) あのたぶん、附属とのいい関係を作らなきゃできないかなって思いますけど。

(中村) 本当にそうだよな。私立でも同じですよ。だって主たる利用目的はその生徒とか、児童・生徒なわけじゃないですか。で、大学のほうの学生も使いに行きたいんだけどって言ったら、いつですか？って、それから始まって、当然、それぞれそこはやっぱり…で、こっちがやりたい日に時間に彼らが受け入れられるかどうかというのからはじまって、聞くの躊躇するようなところが大学側には…。こちら側からすると、[こちらの授業が]主目的ではなく存在しているものに対して時間も決まっていって依頼してっていうのが結構…。その学校図書館側からしたら、たぶん言ってよっておっしゃると思うのですが、でもこっちからすると夏休みに講習やっていて、この時間のこしかダメで、この時間連れてっていい、その後も延々、居てもいい？みたいなね、結構、リクエストするのも厳しいですね。

(森田) そうですねえ。

(中村) だから躊躇すらしちゃうかなって、いつもあの見学もそうだし、演習で使わせてもらうっていうのも、附属ですら、校内校でも、躊躇するのだけど、必要ないのかな。

(フロア 1) いや、いろんな大学があると思うのですが、私も実際、その附属に行かせてもらったりしてすごくその敷居が高いっていう話も聞いたりとか、うちの学校でもその夏休みに受け入れたりしているのですが、でもやっぱり実際の学校図書館現場を知らなくて司書教諭になっちゃうっていうのが本当に致命的じゃないかなって思っていて。やっぱり学校図書館に来て、あ、こんなに自分たちが使っている大学図書館とか他のいろんなもののメディアが違うっていうことをやっぱり意識してもらっていか、そういうことも、この活用っていうものがそういうことを含んだ科目であると思っているので、逆に言えばそういうのも必要じゃないかな。例えその現状としてでも。

(中村) まあでも森田先生の学生さんは基本的に現職だから。

(森田) 現職の人なので、その状況もいちおう前提として来ている。でもそうじゃない、大学の図書館が理想的かどうかはわかりませんが、そういうようなサービスがあるところだったらどう、みたいな。一方の理想的な体験をしてもらうみたいなねらいもあるのですよ。でも 80 人も来られたら、図書館は大変で、司書の方からクレームもいっぱい出ているようです (笑)。結構、受講者にお見せるオリエンテーションの入学生向けのビデオでは、学生が気楽に司書の人に質問するみたいな場面があってそれが影響している可能性はあると思っています。そこで「どういう講習会ですか？」とかがって言われ「すみません」、みたいな感じでやっていますけどね。でも、なかった資料があったとかっていうこともあり、喜

んでいらっしゃる方もいらっしゃるし、やっぱり教材研究みたいなことになると、結構、専門的なところが欲しくなったりするっていうこともあります。そういう先生の教材研究を助けるような学校図書館であってほしいなみたいな、そういうニーズもね、感じてもらったらいいなっていうのもまああるのですけどね。いずれにしても、また考えてみます、附属学校との関係を。

(今井) でも、集中でやるとできるのですけど、15回の授業の通常期間中にやっていたらたぶん見学不可能なのです、うちは。例えば白百合女子大学で学校見学しましょうって言ったらたぶん来なくてもいいよって宣言しなきゃいけないと思います。

(中村) そう。

(今井) 授業時間 90 分で行って帰ってこないといけない。で、別の土曜日にやればみんな来られるでしょ、無理ですっていう話になります。要するに土曜日に授業が入っているから。で、日曜日に行きましょう、学校が空いていませんみたいな話になるので、通常期間中でここ空いていますでしょ？みたいな言い方は今の学生にはほとんど不可能で、そもそも月曜日から金曜日まで全部授業受けていますっていうのが、昼間、普通にあるので。だから一つの、間を取るとするならば、僕の場合はなるべく学校に行った時の写真、学校図書館に行った時の写真を何度も見せるっていうことはします。で、ここにこういう資料がありましたっていうことは出すようにしているけど、それでもやっぱりたぶんフロア 1 さんが言っているようなところの目標までは到達できないっていう問題はあるのかなっていうのは思いますね。ありがとうございます。

じゃあ、ちょっと 3 人にいただいている全体の質問ということで、質問のほうにいくのですが、今、連携の話が出てきたので、他の教科とのつながりってところにちょっと話を移してみたいと思うのですが、他の先生と事前に話できないのですか、要するに他の司書教諭担当の先生と、あるいは教科教育をやっている先生と、あるいは教員免許上の情報教育やっている先生と話できないのですか？というご質問をいただいているのですけれど、ええこれ、たぶん中島先生はあれですよ、自分でいろんな科目をもっている、もっていたから別に連絡をする必要はない…

(中島) でも他の学校で「情報メディアの活用」だとか、今、同志社だったら「学校経営と学校図書館」と「学校図書館メディアの構成」は二つ担当はしていますけど、梅花はたまたま私がもっていましたが、それ以外の学校ではその質問に答えるとすれば、できません。

(今井) できない。

(中島) はい。そういう機会がないです。非常勤で行っている大学では 3 月の終わりに懇談会があって、司書課程と司書教諭課程の [講師] 懇談会があって、前はそういう授業実践のこういう情報交換みたいな、そういうのに使われていたのですけど、ちょっと今、報告会みたいになっているので、ちょっと、もうちょっと共有させてほしいなと思ってはいますけど。だけどもある大学ではまったく無理です。他の先生が私がやってない科目で何をされているかっていうのはもうまったく…聞けないですね。そういう機会がないのですよ。特に非常勤はそのコマしか行かないので。

(中村) シラバスがくるから、冊子ばらばらって見て？

(中島) シラバスは、すみません、見えています。いちおう、他の先生のシラバスは見えています。でもわりとね、やっぱり実際どうやってはるかっていうのは。重複しているなって思う時ありますよ。

(中村) よほど人間関係ができてないと人の授業のことを言うっていうのは難しいから。

(中島) 話をする機会がないですね、全然。そんなお友だちでもないから…



(今井) [集中講義期間中の] 司書教諭 [科目] しかもってない大学ってあるのですが、その場合だと出講時期が違々と学内ですら会えないですよ。要するに全部、他大から呼んできているケースがあるのですよ。5科目10単位、全部、他大学から呼んできていると。連絡会議っていうのは関西に行くと結構、あるのですが、関東はほとんどないですから。それこそ個人的に仲いい人だけだっていう感じですね。森田先生にちょっとうかがいたいのですけど、教員の養成課程とも形が違うのですよね？教員養成課程と連携取ろうと思っても、結構、どうですか、ハードルって低いものですか、それともやっぱり高い？

(森田) 知っている先生とは結構、お話ししますが、そうじゃない先生とはもう、そうじゃない先生っておかしいな(笑)。あんまり話すことのできない先生もいらっしゃいますね。ハードル高いと言うよりも、僕が違う授業をもっていることもあって、あんまりその話になりにくいというか、そういう感じですね。

(今井) 大学によってはなんかね、全然、会議体が違うとこにいて。教職担当が全然、違うのですね。意見を言いに行ってもいいじゃないかって現場の方は思うのですが、言いに行くと大変なのです。大学の先生って授業の中身は任されているっていう前提でみんな動いているので、なんだ介入してくるのかって怒りだす人がたまにいて、すごくそこが怖いっていうのもある。もちろんそんなのは取っ払っちゃえばいいじゃんって話になるのですが、で、だいたい言いに行くと、じゃああなたはこの科目をお願いねって余計な仕事が降ってくるっていうのがあって、私なんかはちょっと切り込めないかなって思います。ということで、結構、連携は難しそうっていう話もあるのですが、ただ、たぶん会場にいらっしゃる方はそこはやって当然でしょ、みたいなところはある、っていうのはあると思いますね。はい。

(中島) もう一ついいですか？

(今井) どうぞ。

(中島) 私のとこの、梅花も教職課程の先生、何人かいらっしゃるのですが、私の印象では教職課程の先生自体、司書教諭っていう存在をほとんどご存じないと思います。もう図書館の先生っていう感じで。だから司書教諭科目を取っているって学生がどうも言う、学校図書館のことっていうよりも、図書館やっているんやねって言う。だから本当だったら司書教諭科目と教職科目は本当に教職科目を取って司書教諭っていう位置づけになっているので、せめて司書教諭科目の人と教職の人とはもうちょっと指導案、私も「学習指導と学校図書館」で指導案書いてもらっているのですが、やっぱり教科のほうでも指導案書かせてはるから、その辺ももっとね、二人が連携したらもっと図書館使った指導案っていうのを、私も考えやすいし、先生たちもそういうのを考えてもらえるかなって思うので、同じ学校であれば何かそういうのがもっとあってもいいかなってすごく思いました。

(森田) ちょっといいですか。この司書教諭の養成だけではなくて、あらゆるところで大学の授業は蛸壺と呼ばれてですね、連携ができてないのです。要するに、カリキュラム・マネジメントがないのですよ。例えば僕が今年辞めて違う人が来たら、まったく違う授業になると思うのです。カリキュラムが維持できないわけですよ。で、僕が反省しているのがちょっと趣味に走りすぎたかなって思って、でも次の人もまたそうかもしれないし、そうすると同じ単位なのに学習内容が違うみたいなことが普通に起こりうる環境なのだと思います。だから司書教諭の専門性や資質、能力っていうのはこういうものなのだっていうのがあって、この科目でこの資質能力育てていきましょうという規準があって、先生が変わってももうそれは維持されるみたいな、つまんなくなるかもしれないけど、そういうものがちょっと必要かもしれないですね。

(中村) それはあれですね、たぶん主任、あの講習はたぶん責任者が何となく正直、不在のまま科目委嘱だけが事務職員によって行われていってって感じなのがよく、私もいろいろなところで聞いてきてよくわかってきたのですけど。大学の場合だと、今井さんとか私とかみたいな司書課程の主任の教員がどれだけ人の授業に口出しすることを恐れないかによって、その人のキャラクターによって、私はかなりそういう授業をしてくださって言うので、それをやってくれる人に委嘱しますって言うのでやっているのですけど。ただ、人を探してきちゃったらもう委嘱した瞬間にその人の授業とかになっていってしまう、しまいますよね。今井さんも結構、言っているのじゃないの？依頼する前。

(今井) 頼む段階でもう言っちゃいますね、うちの大学はこういう方針でやっていますって言うのは言わないといけないので。だからうちは連絡会議はしています。いちおう、たぶん関東圏の中では連絡会議やっているところってそんな多くないですけど、うちは7月に1回、司書と司書教諭課程全員が集まって、いちおうお弁当食べながらこういうふうにはやっています、こういう方針でやっていますよって言うことは確認はさせてもらっていますね。

はい、ということでじゃあ少し後半のほうに入っていきたいと思いますが、このあとコアな内容、何を教えていくかっていう話の中で、ちょっと全員に出ている質問として、新しいメディアの話とかが出てきました。特にあのキーワードで出てきているのが電子黒板、あるいは電子教科書、あるいは学校教育のICTの動向についていかがお考えでしょうか、取りあげるべきでしょうか？ということについて、いろいろな方から、複数の方からいただいております。この辺、そうですね、例えば森田先生とかいかがですか。電子黒板、電子教科書、ツールのほうに走るのはたぶん森田先生的にはちょっと違うほうに入っている…

(森田) よくわかっていますね(笑)。

(今井) はい。違うほうに入れていらっしゃるんですけど、ただどうでしょう、新しい動向とか、たぶん森田先生の場合ですと学校図書館とは違う、学校教育の前提みたいなものというのは、そのICTの使い方とか、メディアリテラシーになると違う文脈の前提を入れてきているということだと思うのですけど、別に森田先生のお話をうかがっているとそこは何か別に取り扱うことについて、まあ別に積極的というか、そういう印象があるのですけど、どうですか、それは間違っていないですか。

(森田) 電子黒板だとか新しいICT機器の動向みたいなものを学部生だろうが、現職の先生だろうがそれは研修の形でね、現職の先生であればですけど、知る必要はあるのだろうというのは思いますが、それがここに期待されるものなのかどうかというところとちょっとわからない。全員がやるべきことなのだろうし、司書教諭の方の何か特殊なものがそこにあればね、あり得るのかなって思います。つまり発展系のようなものであればいいのかもしれないけれども、どうかなくてというのがちょっと感じます。

(今井) むしろなんか教職のほうでこういうのをやるっていう話がだんだん出てきているような印象があって、うちの大学もなんか電子黒板を導入した部屋っていうのが二つぐらいできたのですけど、あれは教職の中ではやっぱり必要、教える話が出てきているって言うことでしょうかね、不勉強なのですか。

(森田) そうだと思います。学校現場のほうが相当変わってきているので、出た時に戸惑わないように、それからそういうことができますよって、うちの卒業生、その学習機会がありましたって言うことを対外的にやっぱり言っていけないところがあるので、大教出身者は電子黒板の前で立ち往生していますじゃ困るので。そういう、うちもそういう部屋を作って模擬授業みたいなのをやったりとかしています。

(今井) うちも設けられたので、司書課程で使いたいなって思って申し込みに行ったらです

ね、埋まっていますって言われたのですね。もう要するに一つ、一部屋で 20 人ぐらいの小さい部屋にうちの場合、入れているので、クラスを入れようと思ったら入らないっていうのもあるし、時間帯が結構、あっちこっちで、使う授業…。森田先生はなぜか、なぜそうなるのかはたぶん文脈からわかると思うのですが、担当されている先生で詳しい方がいるので、それを入れているのですけれども、ちょっと混み合って使えないなんていう状況が出てきているので、ちょっとそこはまだ過渡期だとは思っているのですが、っていうところはあるですね。で、中島先生はどうでしょう、新しい動向ということについてはご関心あると思うのですけれども、どの程度、踏み込んでいくかっていう。

(中島) 電子黒板は梅花ではまだ部屋がありませんでしたので。それからデジタル教科書っていう面でも自分で実際にじゃあそれを使っているのをやってないので。本当に文科省の方針はこういうふうにいるいろいろ報告が出ていますよとか、それからあの教員の ICT の活用は全国調査が出ていますので<sup>7)</sup>。たぶん現場では先生方が事務的には使っているけど、授業ではあんまり使っていない、半分、6 割くらいしか使っていないっていう調査が出ているので。だからやっぱり子どもはどんどん使っていくのに先生が使わないのはね、問題だわっていうこととか、概略的なことしか…その新しい動向っていうのは使ってなくて。私、今年の夏休みも夏期講習で実は電子黒板が当たったのですよ。だけど自分では単にプロジェクター代わりで、その電子黒板に書いたものをちゃんと USB に保存できるとか、それ事務の人が、いや、それちょっと私、わかりませんか言われたので、ちゃんと使えなかったのです。だからこれから夏休みは、夏期講習はちょっと電子黒板、来年「学習指導と学校図書館」が当たっているんで、使おうかなって思っていますけど。

(今井) ただまあ、電子黒板そのものを取りあげること自体はたぶんこの科目の範疇内には入ってくると思うのですが、何分あの機材が高いってということと、大学内で使える人が限られている。かつ教職のほうでも使う話が出ているので、わりとだから司書教諭で使おうとするともう一つ、超えなきゃいけない壁っていうのがあるのかなっていう感じにはなるかと思います。

ちょっと私のほうにマイクが戻ってきたので私の見解を言うと、電子教科書って実は大学で導入できないのですよね。いや、いいのですよ、電子教科書を導入できてもいいのですが、うちの大学タブレット端末を買うお金がないので、タブレット端末使ってじゃあ見せましょうって言うと、私物のタブレットを持ってくるしかない状態だっていう。かつ電子教科書のライセンスを考えるとうちの大学相手に卸してくれるとは思えない状態なので。だからそういうものの活用っていう話はできます。話はできるし、私がどっかから聞いてきたパンフレットを持ってきて話をするとはできるけど、じゃあ使ってみましょうっていうと、もしかするとさっき学校現場って話がありました。学校現場とか学校図書館に行ってみなって話をしているけど、学校図書館とか学校現場に行った方が遥かに活用できる現場が広がっている。だからよく言われる「図書館実習」じゃなくて「学校図書館実習」作ってくれっていう話にもつながるのかなとは思っていますね。

他にもいろいろなご指摘をちょっといただいているのですが、ちょっとそれは時間が残ったところでにしまして、ちょっとじゃあ 3 人の中で、先ほどありました「情報メディアの活用」のカバーする内容というところにちょっと戻ってみたいと思いますが、いかがでしょうか。たぶんお任せしてしゃべってくださると思うのですが、お任せしてマイク渡すとしゃべってくださる方多いと思うのですけれど、例えばちょっと私の方の資料使っちゃいますけど、たぶん 8 項目あって、高度情報化社会と人間；情報メディアの特性と選択；視聴覚メディアの活用；コンピューターの活用；教育用ソフトウェアの活用；データベースと



情報検索；インターネットによる情報検索と発信；学校図書館メディアと著作権とあると思うのですが、例えばこれはもういいのじゃない、みたいなのがございます？森田先生とかありますか。例えばこれはもうまあ、教えるべき科目かもしれないけど、前提、変わっているのじゃないかみたいなのところとか、何か気になるところとか、わかりません、あるいはちょっと発展した話でも構いません。いちおう全部、必要な話ではあるのでしょうか。

(森田) そうですね。インターネットでの検索と発信みたいなものは、中学の技術・家庭科の中でもたぶんあると思います。それから高校の情報の中でもあると思うのですが。やはりより図書館の文脈での内容っていうのはあっていいのだろうというふうに思います。これデータベースはもちろんそうですね、必要だし、教育用ソフトウェアっていうのは、これは何を意味しているのか。

(今井) これはちょっと私も実は教育用ソフトウェアっていうのが、さっきあの中村さんと中島先生の間でやり取りされた Word、Excel の話かなと思ったのですが、ただ僕、これ違った意味じゃないかと思っていて。教育用に作られたマルチメディアソフトとかいう話じゃないか。CD-ROM とかで作られているマルチメディア教材みたいな話じゃないかというのを引きずっているのじゃないかと僕は思っているのですが、フロアの皆さんはいかがでしょうか、この辺？あ、うんうんと頷いてらっしゃる方いらっしゃいますけど。

(フロア 2) あと、ありますよね、先生が開発したそういうソフトウェアとか、サービスとかそういうの。そういうものの活用も、要は教材センターとしては学校図書館の中に組み込んだりできるということだと思うのですが。

(フロア 3) マルチメディア図鑑とか。

(今井) ああ、ありましたね。CD-ROM とか DVD-ROM がついていたやつありますね、小学館とかが出していた『日本大百科全書：ニッポニカ』とか。

(中島) マルチメディア図鑑とかだったら、「学習指導とか図書館」とかでもかなり説明とかね、使えるとか…

(フロア 3) そうですね。

(中島) ね。学生にも図書館行って使っておいでって、ジャパンナレッジなど。

(フロア 2) たぶんあの学習なんでしたっけ、雑誌ありますよね。賞を出している、そういう教育予測等に対して。

(森田) 『学習情報研究』

(フロア 2) ですよね。あれとかで開発されたのって昔からやっていますよね。ああいうのも全部、その教材として使えますよっていうことだと思いますね。

(森田) 算数の時間にこういうの使いますよ、みたいな。

(フロア 2) そうそう、先生がこう開発しているようなのと、あと教育委員会が開発したのとがありますよね。そういう情報とかも全部、もっという使っていくということだと思います。

(中村) それがあれでしょ。NHK for School の。ああいうのが無料なので、わりとクオリティがいいからたぶんお二人はそれをかなり紹介されているのですよね。昔だとその結構ね、パッケージになって、売られて、っていうソフトがいろいろあったのだけど、最近よくあの NHK のあれを紹介するっていうのあるのかなとか思ってたのですが。あれで済んじゃう感じ？そうでもないのかな。結構、なんでも使える。

(今井) いや、だから本当はおっしゃっているように算数用の教材とか理科用の教材のソフトウェアを紹介するって必要なのですが、問題なのはこれ教えた時と現場に出た時の時間差がどうしてもあるので、例えば一番怖いのは、Windows98 で作ったやつが WindowsXP

では動かないっていう話が出てくるのですね。で、大学の教員って、そんな毎年ころころ、私はころころ変えているのですが、ころころネタを変えられないので、Windows98のこのソフトウェアいいねって話をしたら、5年経ったら実は動かなくなりましたっていうのが普通にある。

(フロア2) でも最近だとアプリがそのわりと英語がすごく使っているのですよ。要はアプリで英語の自分で学習を進めていくソフトとか、そういうのとかもやっぱりその教育現場はいっぱい入ってきて。で、その生徒にタブレット入れさして使うケースもあれば、インターネットで使うケースもあるのですが、実際にスタディサプリとかそういうような、そういうベネッセとかそういう会社が提供しているものとかは、もう生徒が見た、視聴して学習したようなのも、全部統計とかも教員がやらなくても全部上がってくるので、それを全教員で共有しているっていうところとかもあるのですよ。だから全部教育用ソフトウェアっていうと全部そういうのもひっくるめたものになってくるのじゃないかなとは思っているんですけど。

(中島) それは有料のものなのですか。

(フロア2) 有料もありますし、無料もある。

(中島) 無料もある。

(今井) だからそういうシステムが入られるかどうかですね。逆に学校現場だとそこに入れることについては障害がないのですが、大学のほうで使った時に、例えば課程の予算でライセンスにお金が出せるかとか、あるいは機材が用意できるかとか、結構、いろんなハードルがあって、非常勤講師の先生がで教育用ソフトウェアって出てきた瞬間、この教育用ソフトウェアってところはこれは自分の非常勤先では絶対使えないっていうスキップの仕方をしています。

(フロア2) 実際に図書館にそういう子たちがやってくるので、結局、その図書館が知っていると、やはり授業で使っていたり、先生が宿題で課題で出したり、いろいろしているので、それが生徒がやってきたら知らないっていうのじゃ対応できませんよね。

(今井) というところですよ。

(フロア3) ただ逆にこれってなんかすごく視聴覚とか情報のほうに、ものすごくこれだけ見ていると、それをやらなきゃいけないみたいな、ミスリードになっているのじゃないかなと思って。本当は「学校図書館メディアの構成」できちんと中を教えていて、それを活用するのだからっていうのであれば、こんなに情報とか視聴覚とかコンピューターとか細かく書かなくてもいいのじゃないかなと思って。それを何となくそういうふうに電子メディアのほうにガーンと引き寄せられていて、それをだから個別に教えるようなイメージになっちゃうのは、やっぱりなんかこれを作った時にこうお互いの、なんていうのですか、そういうのの読み、甘さ、擦り合わせになってないというか。だからそういう意味ではこの情報メディアの特性と選択と活用という形で、もう全部が網羅されちゃうような気がするのですけど。

(中村) 1998年だからね。

(フロア2) そういう意味じゃあ、なんかすごく「[情報メディアの]活用」でいっぱい入れてほしいなと思うのはやっぱりモラル、ネチケットとかも含めた、そういうモラル的なものって、本当に高度情報化社会と人間の中に含まれちゃうみたいな感じで。そういう意味では一番学校の現場の中で今トラブルも多いし、そうなってくるとそういうトラブル系も含めた彼らのその著作権も含めたネチケットとかそういうマナー、モラルっていうところはここに入ってくるのか。

(フロア3) でもそれだと評価と情報をどうするかっていうことになってくるので。

(フロア2) でもそれってね、そうなのよ、そう。で、私、いつもこれで思うのが、そのこ

こで今、言われていることって、教員の免許更新講習とかでもやられているような内容だったりもするわけですね。そうなってくると学校図書館が知っとかなきゃいけないっていうよりは全教員が知っとかなきゃいけないことと、「学校図書館のメディア」の活用っていうところで、切り分けはどうされているのかなあっていうところはすごく気になりますね。

(中村) 今井さんが何か言っていたよね、それ自分で。あれ、中島先生がそう言ったのだっけ、教員免許。

(今井) それは私の方から言いましたね。これは別の派閥からそれぞれ情報活用の話が出てきちゃったのと、あと、学校図書館が情報教育に合流できなかったのが原因だと僕は思っているの。まあ中村さんも一緒に語っている LIPER とかでも、その情報系の中と学校図書館が仲良くできないかみたいな話をしたことがあるのですが、おそらく別の派閥が別々にやっちゃっているの、これ統合するのはすごい大変かなっていう気はします。後の方…。

(フロア 4) 私ですか。いや、もうだいぶ話、出てしまったのですけれども、さっき中島先生がそれは「[学習指導と]学習指導」でっておっしゃったのですけれども、ここの内容の中で実は「学校図書館メディアの構成」っていうのがここに資料組織関係とそれから資料論関係が入っていて、キツキツの科目なののですけれども、そういう他の科目でやった方が有効にその学習ができる内容が非常に多いように私自身は感じているのです。確かに 98 年っていうことで、こういう科目が設定されたってことを考えた時に、この科目っていうのが今、本当にいるとしたらこの中の、ちょっと今、著作権の話とか出ましたけど、残るのはなんなのかっていうのは、すごく少ないのではないかなっていう、ごめんなさい、そんな言い方したらわざわざ 5 科目の内の 1 科目、多く取らなきゃいけないっていうのは少ないのではないかなっていう気はすごくしていますけど、いかがでしょうか。

(中島) いや、本当に私も必要性すごく考えて…本当に必要かっていうのは。

(今井) あのこれはちょっと私見みたいな感じでちょっとまあ 3 人に出してみるのですが、たぶん私、残るのが 1 番と、1 番の高度情報社会と人間と、そこからずっと飛ばしてインターネットと情報検索発信、学校図書館メディアと著作権。人によってはコンピューターの活用が入るか入らないかっていうレベル、1、7、8 みたいな感じになっちゃうのじゃないのかっていうのがいちおう今のところですね。中島先生どう思いますか。

(中島) 本当に私もですし。私もちょっとあの、学校現場にいらっしゃる方と違うかもしれませんが、今この 20 年くらいまでは、やっぱり先生方のそのさっき統計にも出ていましたけれども、ICT 活用の能力というのはまだまだ低そうなので、年代の差もあるのですけれども、だからやっぱりそういうサポートはこの「情報メディアの活用」ができるのじゃないかなっていうのは私のスタンスなのですよね。「学習指導[と学校図書館]」とか「[学校経営と]学校図書館」とか読書指導(「読書と豊かな人間性」)っていうのはやっぱり指導のほうに重きを置くので、どう子どもたちに使わせるかとか、どう利用したらいいかとか、どう解釈したらいいかとかなので。だから今の教育用ソフトウェアの活用なんかはすみません、私、そういう学校現場に今、普通になっているっていうのは知らなかったのですが、「学習指導と学校図書館」でやっぱり印刷メディアも大事だけど、電子メディアで「学習指導[と学校図書館]」も「[学校経営と]学校図書館」もすごくやるべきだと思っているので、「情報メディアの活用」でその教育用ソフトウェアの活用っていうのが必要なのかなっていうのはちょっと私は微妙ですね。

(今井) じゃあ森田先生、どうぞ。



(森田) そうですね、教育用ソフトウェアの中にそういう教材が入ってくるっていうのはなるほどなって思っています。その図書館が教材の流通場所にもなるっていうかね、というのはとってもいい案だなあと思います。先生たちを助けることができるので。で、まあ学校で作った教材、地域教材なんかは図書館にあったらすごくいいし、先生たちが入れ替わるわけなので、先輩の先生が作ったものを残しておいてくれたら、図書館の方がね、前の先生はこんなふうにはやってみたいな情報と一緒にストックしておいてくれたら先生たちの授業作りを相当助けるんじゃないかって思います。そういう意味では教育用ソフトウェアの活用っていうより、教材の活用みたいなことになるのかもしれないし、ちょっとわかんないのですが、そういうようなものはあってもいいんじゃないかなっていうのはありますね。だからそれがどんな形をしようが、紙でもいいわけだし、っていうふうに思いました。で、まあ高度情報化社会と人間という、基本的な、おそらく基盤的な理解になるだろうから、これは必要だろうし。著作権モラルはあるけれども、これもどこか違うところで教えているわけなので、みんなが知っていなければならないことという意味ではどうなのかなっていう気がして。やっぱり「メディアリテラシー」なのかなと思うわけなのです。

(今井) ありがとうございます。ただこれ、まあおそらくちょっとこれ合意できる場所として一番目の高度情報社会と人間っていう、おそらく基本的なところは合意ができていると思うのです。ただ例えば教育用ソフトウェアの考え方っていうのが結構、違ってくると思いますし、あと著作権も実は今たぶん学校図書館的な人にはやるべきという話があるけれども、著作権って実はいろんなことやっているのでもそこどうなのかっていう、まあだから三角ぐらいになるでしょう。で、インターネットによる情報検索と発信ってたぶんこれも三角ぐらいになるのでしょうか。まあ、ただやっぱりこの中の科目の内容についてはもしかすると98年から相当時間が経っているので入れ替えが必要なのところも出てきているのじゃないかなということで、いちおうパネルディスカッションとしてはまとめとさせていただきます。すいません、いちおう時間過ぎていますので、これで終わります。ありがとうございます。

---

1) 今井 gorotaku.「教師の心得」<http://bluelines.natenablog.com/entry/20110908/1315487472>, (参照 2017-09-12). を配布。

2) 今井 <https://prezi.com/i4r8awls1sp-/presentation/> にて公開。

3) 森田 鈴木みどり編『メディア・リテラシーの現在と未来』世界思想社, 2001. 中のモデルやワークを参照。

4) 森田 [全国学校図書館協議会]「新学習指導要領における「学校図書館」関連の記述」<http://www.j-sla.or.jp/material/research/post-46.html>, (参照 2017-06-07) .

5) 森田 American Association of School Librarians. *Standard for 21st-Century Learner*, American Library Association, 2007, 8p.  
[http://www.ala.org/aasl/sites/ala.org.aasl/files/content/guidelinesandstandards/learningstandards/AASL\\_LearningStandards.pdf](http://www.ala.org/aasl/sites/ala.org.aasl/files/content/guidelinesandstandards/learningstandards/AASL_LearningStandards.pdf) (accessed 2016-12-26).  
この中の、「School libraries provide equitable physical and intellectual access to the resources and tools required for learning in a warm, stimulating, and safe environment.」(p.3)。

6) 今井 司書教諭情報化研修プロジェクト「司書教諭情報化研修」情報処理振興事業協会, コンピュータ教育開発センター, 文部省メディア教育開発センター, 2000. に収載。

---

7) 中島 [文部科学省]生涯教育政策局情報教育課「学校における教育の情報化の実態等に関する調査結果」[http://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/zyouhou/1287351.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/1287351.htm),  
(参照 2017-06-07).

## シンポジウム当日回収のアンケート結果

(質問別に集計；順不同)

Q1. パネラーへのご質問がありましたら、ご記入ください。

回答内容	職名
成績のつけ方（＝具体的な達成目標）みなさんはどうしているか。	助教
図書館員がメディアを分析するということについて少しちゅうちょするところがあります。司書教諭は独立した科目を持つとすれば図書館利用教育になると思いますので、メディアの読み解き方を指導する時、メディアの選択がむずかしい。	嘱託講師
5科目の組み替えを行うとしたら、この科目は必要でしょうか。もし必要だとすれば、なにを主眼とした科目とすべきでしょうか。	[短期大学] 教員
他の先生、科目と事前に話をすることはあるか、話をするのは難しいか？教科教育法だとはっきりわかれていると思うが、司書教諭の科目の設定にそもそもムリがあるのか？	—
① ICT 活用の内容とコンテンツ（特にデータベース）の選択 ② メディアの構成を学んでいることが前提か？ ③ 学校司書との役割分担はどう教えるのか？ ④ 学校Ⅰを使わず大学Ⅰを使うのはなぜか？ ⑤ 情報活用能力と情報リテラシー、メディアリテラシーをどう整理するのか？しないのか？	司書
質問ではありませんが…多様なメディアの特性を知り→読みとき→発信までの流れを知るという一連のプロセスを学ぶことは必要だと思います。スキルもちろんですが、今後、新しいメディアが誕生しても、対応できる司書教諭が養成できれば理想的で、その司書教諭が学校で直接に子どもを教えたり、子どもを教える他の教員と連携できるようになると現場はうれしいです。	司書教諭
現場によって（公立にとってはその自治体によって）違う状況とは思いますが、先生方は「電子黒板」の活用について関心をお持ちのように見受けられます。例えば、これを活用した教材や、「電子黒板」と従来の黒板の横断的活用などです。この分野については、この「情報メディアの活用」の範ちゅうでしょうか？そうならばどのようにこれから扱われるもののでしょうか？	学校司書
「情報メディアの活用」がカバーすべき内容と5科目の中での位置づけについてももう少し3人で話し合っただけでないでしょうか。合意できる部分、ちがいを明確にしていなければありがたいです。	—
今井さんがおっしゃっていた検索に文脈があるというのはわかるが、基本の技術（ハウツー）はあって、それは教えなければならないのでは？ただ、中島先生のように特定のソフトウェアの利用にかなり時間をかけてしまうと、今度は学生がソフトに依存しない理解に至っているか不安になりませんか？	准教授
今井先生 - 成績評価は60点が最終試験とのことですが、試験の概要をお教えてください。	大学講師
・お三方へ→教育の情報化、電子教科書（学校教育そのものにおけるICT・情報化の動向）についてはどの程度触れていますか？ ・森田先生へ→グループワークは何故、校種・教科が混ざるようにしているのですか？（私は同じ校種・教科同士でグループを組ませ、自分の専門に即した成果物を作らせています） ・今井先生へ→①学習指導案の作成は何をねらいにしていますか？（メディアを活用した授業ができること？メディアの利点をしること？） ②メディアには電子黒板やPPTソフトなども含まれますか？	専任講師



Q2. パネラーへのご意見がありましたら、ご記入ください。

回答内容	職名
アンプラグドの人はニュージーランド人です	助教
メディアリテラシーで民主主義に関するところですが、現職の教科をもつ先生なら必要だと思いますが、司書教諭は民主主義を生徒（児童）が感じとれるように資料の準備をするまでに思えます。勿論メディア（資料）のスペシャリストでありますからどういう資料、メディアが効果的に生徒（児童）が意見を出したり考えるように出来るかは司書教諭として考えておくべきだと思います。	講師
校種、教科の違いで、情報メディアの範囲がかなり異なると思います。そのあたりはどのように工夫されていますか。	嘱託講師
司書教諭が指導案を組むとなると総合学習的な関わりと、教科への関わりとで変わってくるはず。	—
学校図ではクリティカルシンキングについて教えます。読解や批判的思考、メディアの読み解き方なども含みます。かなり情報リテラシーとメディアリテラシーは重なる部分があると思いますが…。	司書
> 中島先生 HTML 言語についての知識は今でも必要なのですか？（本校の先生方には必要としていらっしゃるかもしれませんが）	学校司書
科目間の内容の重複という意味では、森田先生のお授業内容は私の「学習指導と学校図書館」とかなり重複しているようです。森田先生のご指導のもとで現職の先生方が作られた指導案を見てみたいです！	准教授
メディアリテラシーはこれからの電子メディアが主体となる社会では特に必要かと思っています。他の科目でなかなかとりあげられるところがないので私はこの科目に少し入れているのですが—取り上げるべきメディアが新聞（学習指導要領にもうたわれている）、テレビ等の映像メディア、インターネット情報といろいろありますが、それに適した教材を探すのに苦労しています。教材おすめめのがありましたらおしえてください。	大学講師
中島先生の最後の私見とも重なりますが、学校の中でメディアの専門家として情報活用・情報教育を推進する司書教諭の養成をねらいにするのか、学校図における情報メディアの活用（指導）を推進する司書教諭養成を目指すのかによって、授業内容が異なってくると思いました。	専任講師

Q3. この連続シンポジウムで議論したいことなどありましたら、ご記入ください。

回答内容	職名
司書教諭科目見直しの時期に来ていると思いますので特に学校司書との住み分けも意識して科目全体としてはどうでしょう。	嘱託講師
5科目の体系について	司書
「情報メディアの活用」のコアになる内容は何だと考えたらよいか？	—
「情報メディアの活用」で教えるべきコアは何なのか、ますます分からなくなりました。	専任講師

Q4. 本日のシンポジウムに対するご意見、ご感想がありましたら、ご自由にお書きください。

回答内容	職名
授業実践の検討はとても有意義です。各自、工夫しながら、考えながらバージョンアップを考えているのでヒントになります。	嘱託講師
司書教諭課程では、具体的にどのように学生に教えているのだろうか、ということが知りたくて参加しました。まず、教える方によって、かなり内容というより“色”が違うということがわかり、大変興味深く感じました。(それがよいことか否かは別にして)	学校司書
発表も話し合いも充実していて、聞きごたえがありました。その一方で混迷も深まったように思います。	—
お世話さまです。	大学講師
(中村先生もブログで書かれていましたが) 学校司書の養成課程が始まると、司書教諭科目に教員志望者と学校司書希望者が混じることになるのだろうか、そうになると何に中心を置いて何を教えるべきなのか、難しい問題が新たに浮上しそうです。このようなシンポジウムは継続していくべきだと思います。有意義な会をありがとうございました。	専任講師

## 後日のパネラーの振り返り

今井福司

「情報メディアの活用」については、他に実践を共有する機会がほとんどありませんでした。今回、他の発表者の方の実践を伺って、自分自身の実践を振り返り、改善していくきっかけができたと考えています。同時に、自分自身がきちんと根拠をもって実践しているかということにも気づかされました。その場その場の対応や、次週の授業案を作ることに精一杯で、その教育方法は妥当なものか、ねらいに沿ったものなのかどうか、大学でのFD研修のようにきちんと定期的に振り返ることも必要だと感じました。こういう機会は関西では数多く行われていますが、関東ではそれほど盛んでないように感じています。今後こういう取り組みが広がっていけばと思っています。

中島幸子

司書教諭科目の中で「情報メディアの活用」がいちばん指導内容があいまいだとずっと感じていましたが、今回の3名の実践報告を見て、3者3様と痛感しました。もちろん料理のしかたはいろいろあるわけで、画一的な授業をする必要はないのですが、資格科目という点で、押さえておくキーワードはあると思っています。「学校司書のモデルカリキュラム案」では「図書館情報技術論」の履修となっていますので、「情報メディアの活用」の存在感がますます弱くなる気がします。司書教諭として必要なことは何かですね。また司書教諭科目を担当するために、もっと学校教育のことを知らなければいけないと思います。その意味で今回、現場にいらっしゃる司書教諭の方々との情報交換はとても意義深いものでした。さらにFDの結果など、学生の評価や意見を取り入れることも必要です。今後の自分の授業実践に多くのアドバイスをいただきました。これからこのような機会が定期的に開かれることは司書教諭科目の改革につながっていくと思います。

森田英嗣

「情報メディアの活用」は、そろそろカリキュラムマネジメントが必要な時期になってきたように思います。お話を伺っていると、私の講義も含め、それぞれ思いのこもった授業になっていると思うのですが、担当者が変わると内容も変わるということになっているようです。何を教えるかだけでなく、この科目でどのような資質・能力を育てようとするのかに関する基準がそろそろ提案されてもよいのではないかと思います。また、このことは、その他の司書教諭科目についても同じことが言えるのかもしれませんが。そして、もう一つ、その活動を先導的に行う研究会があるとすれば、多様な関係者を引きつけているこの研究会ではないかと感じました。